漢代大型墓の構造

西村俊範

【要約】漢代における墓葬は、被葬者の生前の社会的地位に規制されるものである反面、各階層の人々が等しく具有していた死後の世界に対する基本的な欲求をその中に具現化したものであるとも考えられる。

本稿では漢代の墓葬の中から特にその墓室構造を取上げて、皇帝陵の墓室構造を文献・発掘例の両面から探り、その王陵としての歴史的変遷の中に占める位置を考察した。その上で、皇帝陵と劉氏一族も含めたその他の大型墓葬との関係を追求して、漢代における政治的秩序維持の問題を考察した。

漢代の大型墓は、戦国伝統の竪穴式木槨墓と皇帝の墓葬としての黄腸題湊を有する横穴式墓葬の系譜を引く各種横穴式墓葬、横穴式の多室磚墓の三群に大別して捉えられ、その関係は大きく三時期に分けて考えられる。すなわち、西漢皇帝陵における黄腸題湊を有する横穴式墓葬（題湊系横穴式墓葬）の採用と大型墓におけるその下賜と理念的模倣、並びに竪穴式木槨墓の併存、東漢前半期における中・小型墓においての題湊系横穴式墓葬の墓室構造プランの模倣・部分的模倣の流行、東漢後半期における大型多室磚墓群の成立と大型墓における題湊系横穴式墓葬の模倣の衰退がこれである。

各時期におけるこれら三群の墓葬の関係は、西漢・東漢を通じての政治的秩序維持の度合を墓葬の面に反映したものと推察することが最も妥当と考えられるのである。

史林　六二巻六号　一九七九年十一月

一　はじめに

漢代の墓葬は解放後中国全土に亘って膨大な数が発見されている。その数は、精粗は別として我々が報告を参照しうる墓葬だけをとってみても、極めて多数に上る。従って、これらの漢墓を歴史資料として取りまとめて総合的に取り扱うこ

との中から、漢代墳墓の編年的研究、地域性・階層性の把握を行なうことが当然の研究課題として要請されている。[1] しかしながら、この様な研究を行なうにあたっても、まだ様々な問題点が残っている。

報告の地域的な片寄りや、墳墓を群として墓地として把握した報告が乏しい事も漢墓の概観を難しくしている。だがそれにも増して、漢代墓葬の頂点に立つべき皇帝陵の内容が未だ明確になっていないことが、墓葬を身分的秩序の表象として階層的に捉えてゆく作業を行なう上での最大の障害となっていることもまた事実であろう。

中国古代社会における大型墓は、中・小型墓そのものの大型化からは直接に引き出し得ない特殊性を備えている。大型墓を作る支配者層の持つ理念、死後の世界に対する観念やその観念の実現のためになされる行動には、中・小型墓の被葬者達のそれとはかなり隔絶したものがあり、むしろ彼らの理念が中・小型墓被葬者より先行してリードする指導理念として存在したと考えられる。

この様な関係が墓室構造の面に興起する時には、大型墓の墓室構造はその形をそっくりまねることによって、または形の基本にある理念を受け継ぐことによって、中・小型墓に何らかの形で写し取られてゆくこととなる。これを墓葬に対する規則と関連させて言えば、墓室構造の積極的規制とも言うことができるし、規制を無視する働きと関連させれば僭越行為とも解釈することができよう。

短命の政権であった秦を引き継いで中国の統一支配を行なった西漢は、強力な官僚統制の網を広く全人民に及ぼすことによって、皇帝による個別人身支配を完成させていった。従って、上述の如き皇帝陵をも含めた大型墓と中・小型墓の間の関係は同時に皇帝陵と大型墓との間の関係としても成立していたと考える事が順当であろう。そこに、皇帝陵を漢代墓葬の歴史的意義を理解する一手段として考察する余地が残されている。

では、大型墓ひいては中・小型墓にその影響を及ぼしてゆくような漢代皇帝陵の様態はどのようなものであったろうか。まずは文献によってその概略を見てみたい。

①　漢代の墓葬に関連する論攷としては次のようなものがある。
1　光永俊介「漢六朝墓制における陵墓の周辺」東方古代研究第九号、一九五九年
2　三上次男「中国古代の甕棺墓」『中国古代史研究』一九六〇年
3　町田章「古代中国における下級墓葬について」史泉二六～二八号　一九六三年
4　町田章「漢河南県城墓葬考」考古学雑誌五四巻二号　一九六八年
5　樋口隆康「空心塼墓について」朝鮮学報四九輯　一九六八年
6　杉本憲司「山東省の一漢代壁画墓について」『日本古文化論攻』一九七〇年
7　杉本憲司「中国古代の墓室装飾」『高松塚古墳調査中間報告書』一九七二年
8　町田章「大陸の装飾墓」『古代史発掘』八　一九七四年
9　町田章「漢代南越国墓葬考」『東方学報』京都第四十六冊　一九七四年
10　杉本憲司「漢代の墓室装飾についての一試論」『橿原考古学研究所論集　創立三十五周年記念』一九七五年
11　樋口隆康『古代中国を発掘する』一九七五年
12　杉本憲司「中国古代の墓地」『日本古代文化の探求・墓地』一九七五年
13　秋山進午「墳墓」『漢代の美術』一九七五年
14　町田章「前漢帝陵の構造」『江上波夫教授古稀記念論集　考古・美術篇』一九七六年
15　デ・ホロート『中国の墓』(The Religious System of China vol. II) 西脇常記訳、一九七六年
16　町田章「華北地方における漢墓の構造」『東方学報』京都第四十九冊　一九七七年

二　文献に見える皇帝陵

(1)　西　漢

西漢の皇帝陵は『後漢書』礼儀志下の劉昭注に引く「漢旧儀」に、「漢旧儀に前漢諸帝の寿陵を略載して曰く」としてみえている。

天子即位の明年、将作大匠陵地を営み、地七頃を用い、方中には地一頃を用う。……武帝の墳高は二十丈、明中は高さ一丈七尺、四周は二丈なり。梓棺・柏(ひのき)の黄腸題湊を内にし、次を以て百官の蔵畢(おお)らば、其れ四通の羨門を設け、大車・六馬を容れ、皆之を内方に蔵す。陟(はず)車石を外し、外方を立つるに、戸に夜龍・莫邪の剣・伏弩を設け、伏火を設く。……

明中と呼ばれる墓室には、梓棺と柏木（ひのき）の黄腸題湊が置かれ、その外側に百官の蔵を入れる部位があり、外部

との出入りに「四通の羨門」が設けられ、その通路（羨道と呼んでよかろう）の内方に大車・六馬が納められ、その外方に夜龍・莫邪の剣・伏弩・伏火が盗掘の防止用に設けられていたことがわかる。

一方、これは皇帝陵の話ではないが、『漢書』霍光伝（列伝第三十八）（以下「霍光伝」と略す。）には宣帝の地節二年（B.C.68年）に霍光が死去した際の話として次の様な記事がある。

光薨ず。上及び皇太后親しく光の喪に臨む。……金銭、絵絮、繡被百領、衣五十篋、璧珠璣、玉衣、梓宮・便房・黄腸題湊各一具、樅木の外蔵槨十五具、東園の温明を賜うこと皆乗輿の制度の如し。……

霍光はその死に際して皇帝より様々の葬送用品を一括して下賜されており、それらは皇帝の葬送用品に準拠したものであったことがわかる。その下賜品のうち、梓宮・便房・黄腸題湊各一具、樅木の外蔵槨十五具はいずれも墓室構造に関連していよう。翻って皇帝陵の墓室構造にもこれらと同名称の設備があったことが考えられる。以下、この「漢旧儀」「霍光伝」の二つを手がかりとして墓室構造を各部位に分けて述べる。

梓棺（梓宮）：「霍光伝」では梓宮と呼ばれており、その顔師古注に、

服虔曰く「棺なり。」と。師古曰く「梓木を以て之を為る。親身の棺なり。天子の制なるがために、故に亦た梓宮と称す。」

と言っている。又、『後漢書』孝明帝紀の李賢注に、「梓宮」に注して、

梓宮は、梓木を以て棺を為る。風俗通に曰く「宮は存時に居る所なり。生に縁りて死に事う。因りて以て名となすなり。」と。

と言っている。

要するに天子の遺骸が安置される部位であり、ここが死後の寝所として宮殿に比されている。「漢旧儀」の記載からみて、これが墓室の中央部に位置すると理解される。

便房：「漢旧儀」には見えないが、「霍光伝」の記載により皇帝陵の設備としての存在が知られる。『後漢書』礼儀志下の劉昭注に引く「漢書音儀」には、

便房は蔵中の便座なり

とあり、「霍光伝」の顔師古注にも、同一の説が引かれる。顔師古は、同じく「漢書」張禹伝（列伝第五十一）には、

便坐は正寝にあらざるを謂う。旁側にありてもって延賓すべきものなり。

と注している。『漢書』陳湯伝（列伝第四十）には、成帝（在位 B.C. 33～B.C. 7年）の昌陵に実際に便房が作られていた事を記して、

昌陵は卑きによりて高きを為り、土を積みて山を為る。便房を度るに、猶平地の上にあるがごときなり。客土の中は幽冥の霊を保たず。浅外にして固ならず。

と述べている。このことから、地上の住居における便坐（寝室のそばにある居間で、客のもてなしもする）に相当する便房が墓中に作られ、ここが被葬者の霊がふだんくつろいで休む場所であった事が知られる。「霍光伝」では便房は梓宮に続いて書かれている。便坐が正寝に接して設けられるように、便房も恐らく墓中の位置としては梓宮に近接して設けられている事が推測されよう。

黄腸題湊：「漢旧儀」・「霍光伝」にともに見られる。「漢旧儀」では梓棺と並んで墓室の中央部に置かれ、「霍光伝」では記載上は梓宮・便房に次いでおり、外蔵槨の前に書かれている。

「霍光伝」の顔師古注には、

蘇林曰く「柏木の黄心を以て、棺外に累ね致す。故に黄腸と曰う。木頭は皆内向す。故に題湊と曰う。」と。

と言う。又、『後漢書』礼儀志下の劉昭注に引く「漢書音義」には、

題は頭なり。湊は頭を以て内に向け、固むるを為す所以なり。

としている。つまり、棺の外周に黄心を持つひのきの角材を木口を内に向けて（つまり年輪の同心円が棺の方角から見えるように）積み重ね、積み方を強固にしてあるもののことになる。又、『後漢書』梁統伝（列伝第二十四）の李賢注に引く

「漢書音義」には、「黄腸」に注して、

柏木の黄心を以て槨を為る。

としており、これが棺外に作られた一種の槨であった事がわかる。便房と黄腸題湊との位置関係については、明瞭な記載がなく、よくわからない。

外蔵槨：「霍光伝」にその名が見られる。「漢旧儀」では「次を以て百宮の蔵をおわる」場所に相当するものと考えられ、その名称からみても副葬品の収蔵庫と言える。墓中における場所としては黄腸題湊の外側にあることが考えられる。

その他：『漢書』酷吏伝（列伝第六十）に、

是に先んじて、茂陵の富人焦氏・賈氏は、数千万を以て陰かに炭・葦・諸の下里の物を積貯す。（田）延年奏して言う。「商賈の或いは予め方上の不祥の器物を収め、其の兼用を冀い、以て利を求めんと欲す。……

と述べている。すなわち、茂陵の大商人達が炭・葦・様々の副葬品を買い占めて、昭帝の大喪の際に暴利をむさぼろうとしたと言うのである。従って、皇帝陵のどこかの部位に炭・葦が使われた事が考えられる。

以上を「漢旧儀」を中心にしてまとめてみると、皇帝陵の内部構造は、その中央に梓宮・便房・黄腸題湊があり、その外側に外蔵槨を持ち、外部との通路として、羨道・羨門が付く形が想定される。このうち梓宮・便房・黄腸題湊・外蔵槨はいずれも皇帝より臣下に下賜している例があり、それぞれが特殊な形態を持つなり、貴重な材料を使用するなりしたものであった事が考えられる。

なお言うまでもない事ながら、羨道・羨門の存在から考えても、この皇帝陵は横穴式墓葬の範疇に属するものと考えてよかろう。さらに、梓宮・便房の名称からも想定されるように、西漢皇帝陵は地上の宮殿をまねて地下に持ち込む事を意図していた事が考えられるのである。

(2) 東　漢

東漢の皇帝陵については、「漢旧儀」にみられる様なまとまった墓室構成の記載がみあたらないが、『後漢書』礼儀志下などにより、その概要を窺うことができる。この「礼儀志」下は、主に天子の大喪の際の式次第を記しているが、その文章には不自然な省略が多く、まとまった意味を取り難い部分がある。以下、「礼儀志」下の文章を追って述べる。

皇帝の死後、その遺骸は西漢同様梓宮に納められる。

東園匠・考工令は、東園の秘器の表裏洞赤、虞は文にして、日月鳥亀龍虎連璧偃月牙檜を画ける梓宮を奏すること故事の如し。

とある。

引続いて、陵の築造の事が述べられる。

司空は土を択びて穿を造り、……将作（大匠）の油緹帳もて以て坑を覆い、石を方べて黄腸題湊・便房を治ること礼の如し。①

黄腸題湊と便房がともに墓壙内の横成要素として見えている。

続いて、天子の遺骸が宮殿より陵に運ばれ、埋葬所に着いた葬列は陵の前に整列し、皇帝の遺骸は墓壙内に運び込まれる。陵に到着した梓宮は霊柩車ごと羨道の西側に置かれ、新しい皇帝は、これと反対の羨道の東側に位置する。諸侯王・公・特進は恐らく羨門に通じる神道②と思われる道の西側、すなわち霊柩車の南側に、九賓・大鴻臚・中二千石・二千石・特進は、神道の東側、すなわち新しい皇帝の南側に整列する。哀策の読み上げと哀哭が終った後、梓宮は東園の武士達によって霊柩車より降されて、羨道を通って墓壙内（下房）に運び込まれる。

その後、東園匠の明器類が墓中に運び込まれ、新しい皇帝による追贈がなされて儀式が終る。

司徒曰く「百官の事畢りぬ。……」……司徒跪きて曰く「請う。追贈せん。」侍中は鴻洞を奉持す。……皇帝進みて跪きて羨道の房戸に臨み、西向して手づから贈を下して鴻洞中に投げること三たびす。……太常跪きて曰く「贈事畢りぬ。」……礼畢らば司空は校を将いて土を復す。

東園の明器その他が運び込まれた段階で、司徒は「百官の事畢りぬ」と言う。このことから、「漢旧儀」に言う「以次百官蔵畢」が黄腸題湊の外、羨道よりも内側の部分、すなわち「霍光伝」に言う外蔵槨に東園匠の明器他の副葬品を運び込む事にあたる事が明らかになる。「礼義志」のこの部分の劉昭注は「続漢書」を引いて、

明帝崩ずれば、司徒の鮑昱喪事を典る。葬日に三公入りて梓宮を安んじて還る。羨道の半ばに到りて、上の下らんと欲するに逢う。昱、前みて叩頭して言う。「礼に、天子の鴻洞にて以て贈るは、郊廟を重ぬる所以なり。陛下危険を冒して、義を以て哀を割かずして柰何せん。」上即ち還る。

と記している。羨道という名称を持つ部位が、墓室中と外部を結ぶ通路であった事、羨道は全ての部分が水平ではなく、地上から地下に下る部分を有する通路であった事が理解される。皇帝の贈事を最後に墓壙での行事は全て終り、墓壙に土が覆せられる。

「礼儀志」下の記載では、この大喪の式次第に続いて、太皇太后や皇太后が崩じて、各々の配偶者である皇帝の陵に合葬される場合の規定を記載している。

合葬には羨道を開通して、皇帝は便房に謁す。太常は導きて羨道に至り杖を去る。中常侍は受けて柩前に到り、謁し、伏哭して止むこと儀の如し。

この記事を素直に読む限り、墓壙の中には、羨道をくぐり抜けた突き当りに便房があり、この便房から柩（梓宮）を礼拝することができる仕組みになっていた事が理解される。従って、墓室内では、便房は羨道と梓宮の中間にあたる所に位置したと考えるべきであろう。また、合葬時には一度閉鎖した羨道が再度開かれて、皇帝以下の人々は墓室内に降りている。このような羨道は竪穴式の墓葬の墓道ではもちろん考えられないものであり、横穴式の墓葬にトンネル式の羨道が付いている形を考慮せねばなるまい。

この横穴式墓室にトンネル羨道が付く形態は、基本的に東漢代の横穴式墓葬とも共通要素を持っており、また文献上の

西漢皇帝陵と比較しても、梓宮・便房・黄腸題湊といった固有名詞はもちろんのこと、横穴式の墓葬のプランとしてもほとんど大差がないと言うことができよう。

以上に概観した通り、西漢・東漢の皇帝陵は、時代を通じてトンネル羨道を持った横穴式墓葬の範疇に属することが明らかになった。個々の実態はよくわからないながら、梓宮・便房・黄腸題湊・百官の蔵を納める部位（外蔵槨・蔵房など様々の名称がある）を基本構造として持つ点も共通しており、これらの構造の配置にも、梓宮・便房が中央にまとまるという一致点をみることができる。

従って、このような基本的構造を備えたプランを有する墓葬の実例が一つでも見出せれば、西漢・東漢の皇帝陵の構造はその細部に到るまでの細い点は無理としても、おおよその概形は想定しうるようになるであろう。

① 『後漢書』孝献帝紀の李賢注に引く「続漢書」はこの部分を「……司空択土造穿、太史卜日、将作作黄腸題湊便房　如礼」とする。

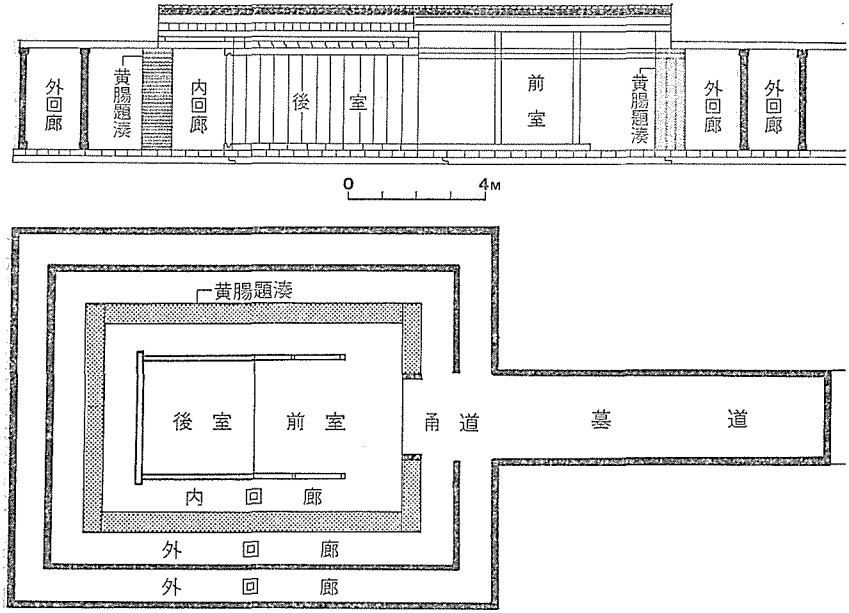
② 『後漢書』光武十王伝（列伝第三十二）の李賢注に「神道」に注して「墓前開道、建石柱以為標、謂之神道」と言う。

三　大葆台西漢墓の発掘

一九七四年、北京市の豊台区郭公荘大葆台において二座の西漢代の横穴式木室墓が発掘された。『文物』一九七六年第六期にこのうちの一号墓についての概略の報告がなされている。[1] 報告はこの一号墓の発掘地点と墓葬内容のレベルから被葬者を諸侯王である燕王と考え、武・昭五銖の出土と漆器に「廿四年五月丙辰丞……」の針刻があったことを根拠として、刺王旦（在位 B.C. 117～80年）と特定している。

この墓（以下大葆台M1とする）は、報告の後に付された魯琪氏の論文[2]に逐一指摘されている如く、前章で検討した漢代の皇帝陵の内部構造に基本的に合致する構造を取っており、この大葆台M1を仔細に検討することによって、今まで未知のものであった漢代皇帝陵の内部構造をより詳しく具体的に理解することが可能になるものと考えられる。

図1　大葆台西漢墓



以下、文献による名称と対比しながら大葆台M1の細部構造を見てみたい。

墓道：墓室の南中央に付く。金代の遺址に攪乱されて、南半部すなわち外端に近い部分が飛ばされているが、残長一六・七m、幅四・二五mを計る。底部には墓室の鋪底板の延長部が延びてきて敷きつめられている。平面図・断面図を信用すれば、両側壁と天井部にも木製の結構があったものと考えられる。木造のトンネル構造を呈していたらしく、水平墓道の可能性が強いように思われる。

北半部すなわち墓室に近い部分に馬十一匹と馬車三両が置かれていた。これが「漢旧儀」に言う「大車・六馬を容れ、皆これを内方に蔵す」にあたるものであろう。従って「漢旧儀」に言う内方・外方は、言葉としては出てこないが「羨道(墓道)」の内半部・外半部を意味していたと理解されるのである。

墓道の外端部が飛ばされているので、外方の「夜龍・莫邪剣・伏弩・伏火」に相当するもの、さらにトンネル墓道が外部に接する部分の構造は残念ながらわからない。外回廊：いわゆる黄腸題湊の外側、墓壙内の外周部に

あり、扁平な木板で仕切って内外二道にわけられている。外側壁には木板を墓壁際に立て並べ、内側壁はいわゆる黄腸題湊の外壁がこれにあたる。周長七七・二m、内外とも幅一・六m、高三m、平面回字形を呈する。両端は甬道と呼ばれている墓道と前室の中間部に接している。

内部に大量の陶器・陶俑などが残っており、この部分が副葬品の収蔵部位として使用されていた事がわかる。その位置取りがいわゆる黄腸題湊の外側にくることからみても、これが「漢旧儀」に言う「百官の蔵」を収める部分、「霍光伝」に言う「外蔵槨」にあたる事は確実である。

木材には油松（Chinese Pine）が使用されており、「霍光伝」に言う樅木（まつ科の木）とはともにまつ科の木である点が共通している。

黄腸題湊：他に呼び様がなく、発掘報告にも最初からこの名称が使用されている。前述の外回廊の内側にあり、ひのきの心持ちの角材一五八〇〇本を□形につみあげて作られている。角材は長さ九〇cm、一〇cm角で、いずれも木口を内側の棺の方に向けて積まれている。[3] 黄腸題湊全体では外径で南北一六m、東西一〇・八m、高さ三mを計る。ひのきの角材はただきっちりと積み重ねてあるだけで、枘・枘穴などの特別の組み合わせの設備はなく、細部を薄片と木屑で調整しているのみである。

この恐ろしく奇抜な構造が文献に言う黄腸題湊にあたる事は疑いない。位置的にみても中央の棺安置部分と外側の副葬品収蔵庫の中間にあって、槨としての機能を果たしており、「漢旧儀」「霍光伝」の記載と矛盾しない。また「霍光伝」の顔師古注に引く蘇林が言うように、ひのきの黄心の材（心持ちの材）が棺外に文字通り積み重ねられており、木口は全て棺の方に向いて、木の頭がぎっしりと集められる形になっている。

槨室（後室）：黄腸題湊の内側の北半分にあたる。南北七・二〇m、東西九m、中央部高三・三m。前室よりも天井が低く、室内には更に木板で□形の槨室が作られている。槨室の内部に棺が安置される。棺は棺床の上に置かれていて五重

になっている。最内側の棺は内外ともに黒漆塗り、それ以外の棺は外側が黒漆塗り、内側が紅漆塗りになっている。外側の二つの棺の南の短辺には門扉がついており、ここから出入りして前室に通じていけるようになっていた。

棺内には玉衣・銅鎏金嵌玉龍頭枕の他、玉璧・玉璜などの玉器類があった。盗掘されていなければ恐らく多量の玉製品が存したと思われる。この部位が文献に言う梓宮にあたる事は明白である。棺の南側面に門扉がついて前室との通路となっている事は「生けるが如く死後も生活する」宮殿としての梓宮に必要不可欠な設備であろう。

前室：黄腸題湊の内側の南半部にあたる。南北七m、東西九m、高約四mで、後室よりも天井が高い。前室内には東西両側に南北方向の地伏があり、その上に四本の立柱が建っていて、南北方向の三本の梁を支えるという三梁四柱の制を取っていた。この梁から東西方向に円木の横木をわたして覆いにしていた。この構造は、地上における家屋の形をまねることをめざしたものと考えられる。

この前室内に置かれた漆床二、象牙製六博棋、各種器物・食品（陶壺・陶魁・陶鈁・獣骨）などの遺物からみても、ここが居住と饗宴の場を意図して作られた部屋である事は疑いない。よってこの部位は文献に言う便房にあたることになろう。

木室の外周：四周の墓壁と外回廊の外壁との間には厚さ三cmの木炭層が、墓底には二〇cmの木炭層と五〇cmの白膏泥の層、墓頂にも五～一〇cmの木炭層二枚と四〇～七〇cmの白膏泥の層があった。『漢書』酷吏伝より皇帝陵における使用を推定した「炭」はおそらくこの様な用途に使われるものであろう。④

以上、大葆台M1の墓葬構造を文献に見える皇帝陵と対比させてみた。この結果大葆台M1の墓葬構造は、梓宮・便房・黄腸題湊・外蔵槨・羨道に相当するものを備え、予想される皇帝陵の構造と細部を除いてほぼ完全にオーバーラップさせうることがわかった。大葆台M1は、その製作の動機（下賜か模倣か）は別として、当時における皇帝陵のスタイルを部分ではなく全体として採用して構築された、皇帝陵に準ずる墳墓とすることができよう。この大葆台M1の発掘によっ

て、我々は皇帝陵の構造全体の概略を知ることができるようになったと言えるのである。

本章では従来文献によってしか知られなかった、皇帝陵の制である黄腸題湊を持った横穴式墓葬の実例について考察した（以下にはこれを題湊の特徴に注目して題湊系横穴式墓葬と呼称することにする）。大葆台M1は紀元前一世紀前半の燕王の墓と考えられるものであり、純然たる皇帝陵でない事は言うまでもない。また今の所、題湊系横穴式墓葬の形態を推測しうる例がこれ一例のみであることから、題湊系横穴式墓葬にどのような多様性なり時代的変遷なりが考えられるかはよくわからない。

西漢・東漢の皇帝陵に関する文献と大葆台M1がほぼ基本的に一致していることから考えて、細部における相違はありえても、梓宮・便房が中央に位置し、黄腸題湊が梓宮を囲み、外側に副葬品が入り、トンネル羨道が付くという大筋についてはもはや動かないのではないかと考えられる。

① 北京市古墓発掘弁公室「大葆台西漢木槨墓発掘簡報」文物一九七六年第六期

② 魯琪「試談大葆台西漢墓的〝梓宮〟〝便房〟〝黄腸題湊〟」文物一九七六年第六期

③ 二〇㎝角のものが若干ある。注②三二頁。

④ 発掘例からは確証を得ないが、葦も恐らく炭と同一の用法をされたのではないかと思われる。魏文帝の詔では「葦炭を施すこと無く」と併称される。本文九四頁参照

四　題湊系横穴式墓葬の初現・変化・終末

前章では題湊系横穴式墓葬そのものの構造について考察してみた。このような「横入り通路を付けた地下宮殿」と称してもよい奇抜な構造を持つ題湊系横穴式墓葬は、中国の王陵の系譜の中でどの様な位置を占めているのであろうか。次にその初現と終末を探り、あわせてその材質にも言及する。

(1)　初現（戦国とのつながり）

西漢・東漢の皇帝陵である題湊系横穴式墓葬は、考古学的に見れば、横穴式墓葬の中の一形式とすることができる。横

穴式墓葬は戦国秦の小型竪井洞室墓に源を発して、既に戦国後期に出現している。但し、これらの墓葬はいずれも、地上より深く掘られた竪井の底から横向きに素掘りの墓坑を掘り進んだものであり、作りうる墓室の大きさにも限度がある上、墓壙内の木室・磚室の構築も今の所その痕跡がみとめられない。また、この方法は、広い面積にわたって掘り込んだ墓壙に横穴式の墓室・墓道を作って、土で覆うやり方とは異なっている。

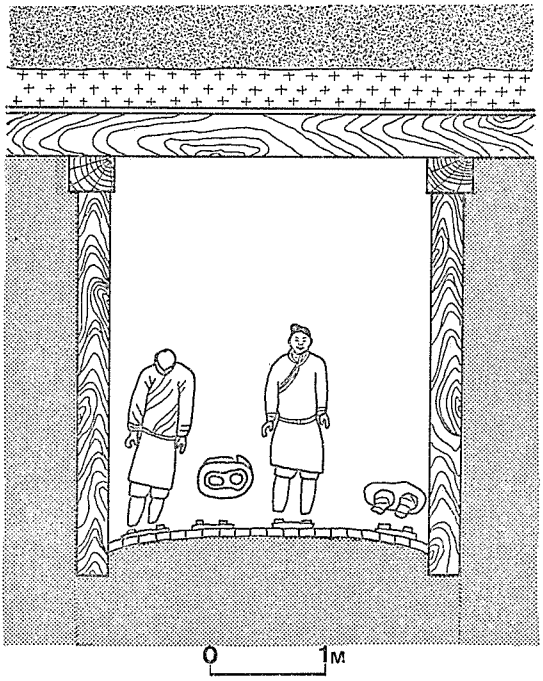
後の横穴式墓葬のやり方に最も近い例を求めれば、町田章氏が指摘されるように、秦始皇陵の1号陶俑坑に目を向けねばなるまい。[1] 陶俑坑は、秦始皇陵の陪葬坑として、軍団を構成する陶俑群を納めたもので、広く掘り下げた土壙内に頂部を柵木で覆った木室が構成されている。これに付属する門道も斜坡式ではあるが、木造トンネルに近い構造を推定しうる。町田氏はこの陶俑坑の形態と秦始皇陵に関する文献（『水経注』渭水条）にもとづいて始皇陵の内部構造を横穴式と推測されている。[2] 始皇の葬儀が終了した後、陵墓工事に関係した工匠達は始皇陵の内部構造を知りすぎている事を懸念されて殺された。

『史記』秦始皇本紀には、

大事畢りて已に蔵すれば、中羨を閉じ、外の羨門を下ろして尽く工匠の蔵する者を閉じてまた出ずる者無からしむ。

と記されている。これは大葆台M1のようなトンネ

図2　陶俑坑断面



ル羨道の内端・外端の門を閉鎖して、トンネル羨道の内部に人間を閉じこめる形を考えれば最もよく理解しうるものである。従って秦始皇陵はトンネル羨道を持った横穴式墓葬である可能性が強い。

また、『漢書』楚元王伝（列伝第六）において劉向は、

秦始皇帝は驪山の阿に葬らる。……石槨を游館となし、人膏を燈燭となし……珍宝の蔵、機械の変、棺槨の麗、宮館の盛はあげてたずぬるべからず。

と述べている。顔師古注は、この「游館」に注して、

多く石を累ねて槨を壙中に作り、以て離宮の別館と為すなり。

と言っている。『史記』秦始皇本紀では、始皇陵の内部について、

槨を致して、宮観・百官、奇器・珍怪を蔵より徒してこれに満たす。

と述べている。いずれにしても、始皇が彼の墓中に地上の宮殿を模した死後の宮殿を築こうとした事は確かである。これは、墓中に梓宮と便房を設け、死後の居住空間を地上の宮殿的なものにしようとした漢代の皇帝陵とその造墓思想を一にしている。横穴式の構造とあいまって、秦始皇陵はまさに漢代皇帝陵の理念上の祖形としうるものと考えられる。

一方、秦始皇陵には漢代皇帝陵の最も特色的な構造である黄腸題湊に相当する施設は、今の所それに相当する記載が見当らない。但し、黄腸題湊が漢代皇帝陵において初めて創作されたものでない事は確実で、題湊そのものは先秦の文献にその記載を見る事ができる。『呂氏春秋』巻十節喪篇に言う。

国いや大きくして、家はいや富み葬はいや厚し。含珠鱗施・夫れ玩好貨宝・鐘鼎壺濫・畢馬衣被戈剣はあげてそれ数えるべからず。諸の養生の具は備わざるものなし。題湊の室は棺槨を数襲し、石を積み炭を積み以てその外に環らす。姦人これを聞きて伝えて以て相告ぐ。上は厳威・重罪を以てこれを禁ずると雖もなお止むべからず。

ここに言う題湊の室は、「黄腸」とも記されていないし、その墓室形態としても竪穴式か横穴式かが明瞭でない。但し、

戦国伝統の竪穴式木槨墓によって、この文章を解釈しうる事も事実である。王伯供氏は、琉璃閣M140の解説において、竪穴式墓壙の周辺に石と木炭を詰め、この中に棺槨を置く竪穴式木槨墓を先述の『呂氏春秋』の墓葬の具体例にあてている。[3]周囲に石・炭を詰めてその内部に棺槨を置く形は、華北の王陵クラスの墓にも見うけられる。

戦国の魏王陵とされる河南省輝県固囲村M2[4]は石墻の中に、木材を交互に長手積み・木口積みにして部分的な題湊を作った槨を入れ、その中に棺と木炭を詰めている。また戦国の中山王陵とされる河北省平山県三汲公社のM1・M6[5]も槨の

図3　固囲村2号墓墓坑断面

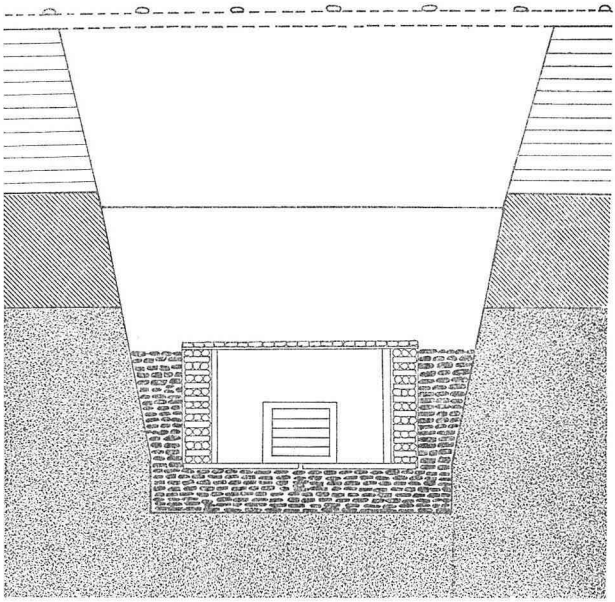
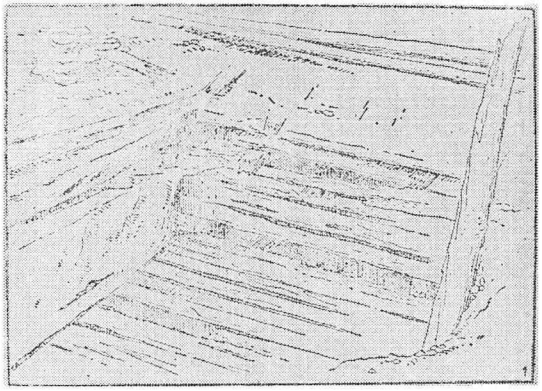


図4　固囲村2号墓木槨スケッチ



形は不明ながら、石墻と木炭の囲いの中に棺槨を作っており、基本的構造が固囲村M2と一致している。大葆台M1の黄腸題湊のような形のものだけではなく、竪穴式木槨墓の木槨も「題湊」と呼称された可能性は充分考えられる。[6]

『礼記』檀弓篇上に天子の槨を記して

柏槨は端を以てす。長六尺なり。

とあり、鄭玄はこれに注して

端を以て題湊するなり。其れ方は蓋し一尺。題は……頭なり。湊は……聚なり。

と言っている。一尺四方の木の頭が聚まるとする鄭玄の解釈は、恐らく周代の知識によるものではなく漢代の天子の槨である黄腸題湊を念頭においての発言ではないかと考えられる。但し、先述の固囲村M2の木槨にも棺の方に木口を向けた木材の積み方が部分的に見られるので、このような竪穴式木槨墓の木槨を念頭において理解しても『礼記』の本文の解読は可能である。従って『礼記』の本文に言う「天子の槨」を、『呂氏春秋』に「題湊の室」とされるものと同一構造と考え、その実例を固囲村M2の木槨の形に求めれば、『呂氏春秋』においてなぜに姦人がこれをまねることが厳戒・重罪をもって禁じられたかも理解できるようになる。

戦国時代の横穴式墳墓で題湊を有する例が今の所見当らない以上、戦国時代における題湊は題湊系横穴式墓葬のような横穴式墓室構造に置かれたものとは考えにくい。むしろ、固囲村M2などのような竪穴式木槨墓の槨を指し示す言葉と解することの方がよりふさわしいのではないかと考えられる。

『礼記』喪大記篇に

君の殯には輴を用い、攢(あつ)めて上に至り、畢く塗りて屋とす。

と言い、その鄭玄の注は、

攢は猶茸のごときなり。屋は殯上の覆屋の如きものなり。……天子の殯は棺を居らしむるに龍輴を以てす。木を攢めて題湊して槨

を象る。

と言う。つまり天子の霊柩車の周囲には題湊の形で木を棺より高く積み上げ、その上に塗り固めて屋根をつけるのである。

同じく『礼記』檀弓篇上には

天子の殯には菆めて龍輴に塗りて以て槨とす。

と言い、その鄭玄の注は、

木を菆めて以て龍輴に周らし、槨の如くにしてこれに塗る。

と言っている。すなわち、題湊の形態を取る木材の集積物が墓葬における槨としてではなく、霊柩車の覆いとして用いられているのである。題湊の用途が墓中にとどまらない事がわかる。

古来、中国においては、松柏の木には強い生気が浸み込んでおり、それが死骸への悪影響を防ぐ作用を持っていると考えられていた。[7] 従って、できるだけ多くの柏木（ひのき）を集めて、柏木に浸み込んだ生気によって霊柩車や棺を包み込むことができるならば、死体への悪影響を防ぐには最も有効な方法と考えられたことは間違いない。木の生気が木の内部、特に中心部から発するものである以上、棺の方に木口が向けられていなければ意味がないし、またそうすることによって使用する木の本数を増やしてたくさんの生気を集めることができる。さらにその木材も心去りの材ではなく、生気のエキスを含んだ黄心の材である必要があったのである。

大葆台M1においては発掘時においても、黄腸題湊の部分に積まれたひのきに芳香が残っていたと記されている。[8] 恐らく当時の人々にとっては「ひのきの生気」は具体的には「芳香」として理解されていたのではなかろうか。ひのきが墓中の槨として題湊の形で用いられているのも、棺の周辺をひのきの木口で囲むことによってまた同様の作用を期待してのことと考えることができる。

題湊は「棺に繞らす防護用のカプセル」がその本来の機能なのであり、そのために題湊という言葉は墓室形態としての

竪穴式・横穴式といった概念とは、その言葉の原義上ストレートに結びつけ得ない。逆に言えば、竪穴式・横穴式のどちらの構造においても黄腸題湊は作り得る。題湊系横穴式墓葬の題湊の祖形を固囲村M2の木槨や『呂氏春秋』『礼記』に求めても筋ちがいとは言えない事が題湊の原義に基いて理解しうるのである。[9]

以上の考察によって、漢代の皇帝陵たる題湊系横穴式墓葬は、題湊を形を異にするが戦国の竪穴式木槨墓より、横穴式墓室形態を秦始皇陵より系譜的には受け継いでいると言う事ができる。従って漢代皇帝陵は秦始皇陵も含めた戦国王陵の継承発展として捉えることができる。

一般に漢は秦制を受け継ぐとされているが、黄腸題湊が秦制に存在するか否かが、漢皇帝陵が秦制のみを受け継ぐものであるか否かを決することになる。『呂氏春秋』節喪編に見える題湊は、『呂氏春秋』そのものの成り立ちから考えてその製作されていた地域を確定し難い。始皇陵も含めた戦国秦王陵に題湊が存在したか否かが検討される必要がある。

(2) 変化（材質）

次に墓葬の構成材料について考えてみたい。大葆台M1が全て木製の構造を取るのに対し、題湊系横穴式墓葬にそれ以外の材質が考えられる例がある。『後漢書』礼儀志下には「方石治黄腸題湊便房」とあり、石製の黄腸題湊・便房が考えられる。華北地方における木材不足の深刻さが、東漢代における石室墓・磚室墓の流行に拍車をかけた事は充分推定できる事であり、[10]ましてや黄腸題湊のような、およそ高価な木材の浪費としか言えない構造を作り得る期間と人物が限られていたであろうことは容易に想定される。

『後漢書』劉焉伝（列伝第三十二）に劉焉の墓の築造の話が記されている。

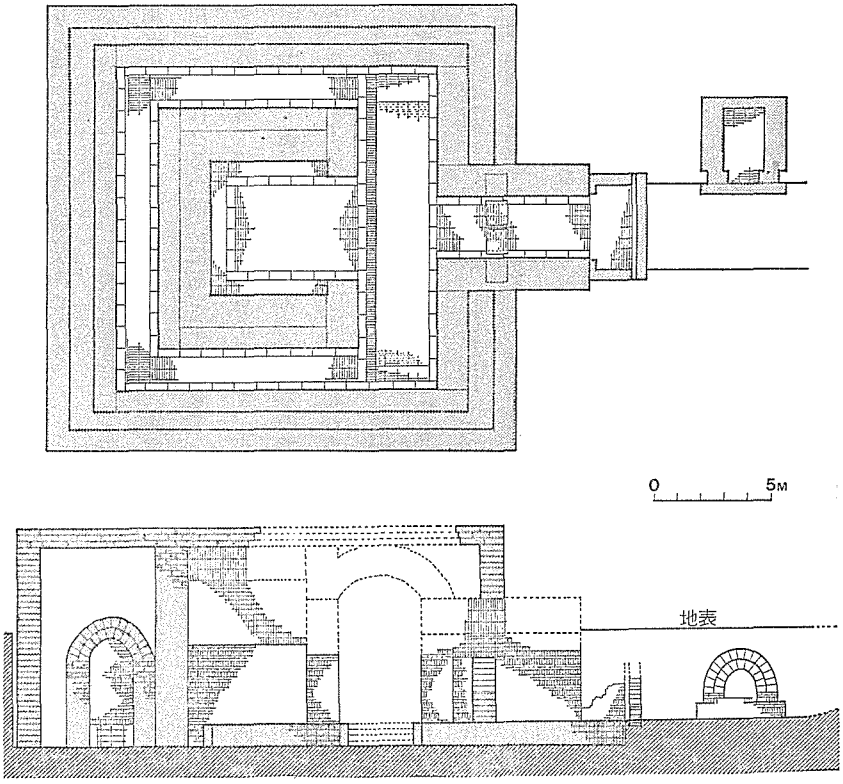
立つこと五十二年にして、永元二年（A.D.90年）薨ず。……是の時竇太后朝に臨み、竇憲兄弟権を擅にす。太后及び憲等は東海の出なり。故に焉と睦じくして……大いに為に冢塋を修め、神道を開き、吏人の冢墓を平夷すること千を以て数え、作る者は万余人なり。常山・鉅鹿・涿郡の柏の黄腸・雜木を発すれども、三郡備うる能わず。復た余州の郡の工徒及び送致する者数千人を調

し、凡そ徴発揺動すること六州十八郡、制度は余国の及ぶもの莫し。

すなわち、A.D. 90年に薨じた中山簡王劉焉は、生前竇氏と親しかったという縁故から自分の墓の築造の際に、自国以外の州郡からも柏の黄腸と雑木を徴発してもらったのだが、集められなかったというのである。これが、柏の黄腸題湊を墓内に作るための徴発であったことは明白である。では黄腸が集められなかった中山簡王劉焉の実際の墓はどのような材料でどのような構造に作られたのであろうか。幸いに中山簡王劉焉の墓と推定される中山王墓が発掘されている。定県北庄漢墓である。⑪

定県北庄漢墓は、出土品の金鏤玉衣の上に「中山」の墨書があり、刻石の銘文に中山国以外の郡国名があって、築造に徴発された人間が極めて広範囲

図5　定県北庄漢墓



かつ多数にのぼる事から中山王陵と推定された。

墓室は全て磚築であり、その墓室をすっぽりと覆う形で石牆が築かれている。

その墓室構造は多少の変形はあるが題湊系横穴式墓葬に属する。中央の厚さ約二・五mの磚壁が黄腸題湊に、その内部が梓宮に、回廊部が外蔵槨にあたる。便房に相当する部分は推定がむずかしいが、主室に六mほどの奥行があるので主室前半部ともしうるし、黄腸題湊からは、はみ出すことになるが前室にあてることもできよう。柏の黄腸が集められなかったという記事も、本来柏木の黄腸題湊たるべき部分が磚で築かれている点から見て、事実だったと考えられる。同時に柏の雑木を集めて炭を作り得なかった事が、磚室を石牆で覆った理由とも考えられるのである。

本来、木で作るべき黄腸題湊を、磚・石などで代用する例は、この北庄漢墓にとどまらなかった可能性がある。

東漢の都である洛陽より、一般に「黄腸石」と呼ばれる石が多数出土している。[12] 羅振玉氏の収集した石が五九個あり、その中に年号のあるものが五四石ある。[13] 内訳は永建（A. D. 126～132年）の年号をもつもの四五、陽嘉（A. D. 132～135年）が三、元嘉（A. D. 151～152年）が二、建寧（A. D. 168～172年）が三、嘉平（A. D. 172～178年）が一である。またこれ以外にも、周進氏の『居貞草堂漢晉拓影』に永初（A. D. 107～113年）が一つある。[14] いずれも二世紀の年号である。

このうち、その銘文に統一的な書き方のあるグループがある。

熹平元年十月二十九日更黄腸掾王條主、第九百廿五……（陶斉旧蔵）

建寧五年三月十四日更黄腸掾王條主……（羅振玉蔵）

……更黄腸史袁庚主……（周進蔵）

建寧四年十一月……黄腸石……（主吏の名不明）……（『水経注』所載）

羅振玉氏は黄腸題湊が天子の葬制であること、天子には寿陵の制がある事を考慮して、これらの石を皇帝陵のものと考えた。[15] その上で、永建・陽嘉の石は順帝（～A. D. 144年）の憲陵、元嘉は桓帝（～A. D. 167年）の宣陵、建寧・熹平は霊帝

（～A. D. 189年）の文陵の石と考えている。百石にも満たない例の中での話であるが、たしかに羅振玉氏の主張に都合のよい年号ばかりが集まっている感がある。これらの石の製作監督者に「掾」「史」といった官僚が当たっていること、同じA. D. 172年の三月十四日と十月二十九日の黄腸石を掾の王條なる同一人物が管理して扱っている事から考えても、その使用対象が皇帝陵である可能性はきわめて高いと考えられる。『陶斉蔵石記』に載せる禹伯石には「禹伯石広三尺厚二尺長三尺三寸弟……陽嘉元年十一月省……」と刻しており、「省」は「省其工」の意と思われるので、やはり石の製作の公的な監督者の存在が想定できる。永初の一石はもし皇帝陵のものであれば、安帝（～A. D. 125年）の恭陵のものであろう。

これらの石に「黄腸に更える」意味の銘がある以上、その使用部位が定県北庄漢墓の磚の黄腸題湊にあたる部分であることは疑いない。二世紀に即位した後漢の皇帝のうち、在位年代に幅があって、ある程度の規模の寿陵を作り得た皇帝は、魏代に入って禅じた献帝を除くと、安帝・順帝・桓帝・霊帝の四人である。羅氏の説を容れればそのいずれもが石の黄腸題湊を作っていた可能性をもつ事になる。

黄腸題湊を全て石・磚で作る事は本来は木が入手できない場合の止むを得ない処置であったことはまちがいない。もし黄腸題湊の本来的な意味が誤またずに伝わっていたのであれば、石・磚の黄腸題湊が全くその機能を果たさないものであることは充分承知されていたはずだからである。従って、たとえ大がかりな黄腸題湊は無理としても、何らかの便法を試みることによって少ない木で黄腸題湊の実を上げようという努力がなされたことは充分考えられる。

『周礼』夏官方相氏に天子の大喪の際のことを記して、

方相氏、大喪には柩に先んじて墓に及んで坑に入り、戈を以て四隅を撃ち方良を殴る。

図6　熹平元年黄腸石

と述べる。この鄭玄の注には、

方良は罔両なり。天子の槨は柏の黄腸を裏と為し、表は石を以てす。国語に曰く「木石の怪夔は罔両なり。」と。

と言い、賈公彦の疏は、

罔両の義を有つを見わさんと欲す。故に漢法を引きて証と為す。又、(『礼記』) 檀弓に云う。「天子の柏槨は端を以てす。長六尺なり。」と。槨の柏なるを言うは則ち柏の心の黄腸を取りて槨の裏を為るなり。故に漢は依りてこれを用い、表は石を以てす。古には言無しと雖ども漢もまた古に依りて来らば蓋し周時にもまた表は石を以てせん。故に罔両を有つなり。

と言う。漢代の天子の槨は裏木表石であり、この制は周制より引き継いだものと思われるので、鄭玄は木石の怪である罔両が周代の天子の槨に宿ることを言う為に漢法を引いて証としていると言うのである。鄭玄 (A. D. 127～200年) は後漢の人であり、二世紀の皇帝陵は本物の黄腸題湊と黄腸石を表裏に半分ずつ組み合わせた構造を取っていた可能性が窺える。

(3) 終　末

(2)に述べた通り、題湊系横穴式墓葬はその材質・細部形態は別にして、霊帝の文陵にまでその存在を想定することができる。次にその終末時期について考えてみたい。

魏の文帝は、黄初三年 (A. D. 222) 冬十月、自らの寿陵を作るにあたって終制に関する詔を発布した。[16]

……寢殿を立て、園邑を造り、神道を通すこと無からしめんとす。……棺槨は以て骨を朽ちさするに足るに為り、衣衾は以て肉を朽ちさするに足るのみ。……葦炭を施すこと無く、金銀銅鉄を蔵すること無く、一に瓦器を以てし、古の塗車・芻霊の義に合せよ。棺はただ漆を三過に際会し、飯含するに珠玉を以てすること無く、珠襦玉匣を施すこと、諸の愚俗の為す所を無からしめんとするなり。……

この詔は、従来は玉衣 (玉匣) の廃止に関連して有名であった。しかし、その文章の全体をみてみると、この詔によって廃止されるものは、墓壙につめる葦炭にはじまって金銀銅鉄の副葬品、ぜいたくな棺、含玉・玉衣、諸の愚俗のなす所にまで及び、まさに墓葬を構成するあらゆる物資にわたって言及されている。文帝の詔の目的は漢代の皇帝陵をはじめと

する大型墓葬に見られる浪費的墓葬の全体を否定しようとする点に存している。

黄腸題湊がこの詔の時点まで残存していた確証は今の所得られないが、もし仮に残存していたとしても「諸の愚俗のなす所」に黄腸題湊が含まれて考えられたであろう事は容易に推察しうる。棺槨を骨を朽ちさせるものとして捉える意識がある以上、黄腸題湊は全く不必要な構造と思われる。従って、この黄初三年の詔は皇帝陵としての題湊系横穴式墓葬の終末を考える一つのメドとしうるであろう。⑰

① 始皇陵秦俑坑考古発掘隊「臨潼県秦俑坑試掘第一号簡報」文物一九七五年十一期

② 第一章注①の16、四～六頁

③ 中国科学院考古研究所『輝県発掘報告』一九五六年、三三～三四頁

④ 注③八四頁

⑤ 河北省文物管理処「河北省平山県戦国時期中山国墓葬発掘簡報」文物一九七九年第一期

河北省文物管理処『河北省平山県戦国中山王墓出土文物展覧簡介』一九七九年

⑥ 平山県三汲公社M1の槨室から出土した銅版兆域図に「夫人堂方百五十尺、椑棺中棺視哀后、其提睫（題湊）長三尺」の銘がある。

朱徳熙・裘錫圭両氏はこの「提睫」を「題湊」にあてている。

朱徳熙・裘錫圭「平山中山王墓銅器銘文的初歩研究」文物一九七九年第一期

⑦ 第一章注①の15、八一頁

⑧ 第三章注①二四頁

⑨ 『塩鉄論』巻六散不足の条にみえる「繡檐題湊」は、竪穴式木槨系の題湊の壁面に刺繍した布を垂らしたものであろう。

駒井和愛「中国墳墓の変遷」『中国考古学論叢』一九七四年、所収、彩篋塚は漢代の竪穴式木槨系の題湊の例としうるが、後漢代の墓であるので、横入り墓門が付いて変形している。

⑩ 長広敏雄「序説　画象石とは何か」『漢代画象の研究』一九六五年

⑪ 河北省文化局文物工作隊「河北定県北庄漢墓発掘報告」考古学報一九六四年第二期

⑫ 馬衡「中国金石学概要」北京大学研究所国学門月刊一巻六号　一九二七年、『凡将斉金石叢稿』一九七七年所収。

⑬ 羅振玉「丙寅稿黄腸石拓本跋」「松翁近稿漢黄腸石拓本跋」『羅雪堂先生全集続編』

⑭ 楊樹達『漢代婚喪礼俗考』一九三三年、九七頁

⑮ 馬衡氏も同意見である。注⑫参照

⑯ 『三国志』魏書文帝紀

⑰ 青龍二年（A. D. 234）後漢の献帝である山陽公が薨し、漢の礼で葬られた。（『三国志』魏書明帝紀）裴松之注に引く「献帝伝」では「命司徒、司空持節弔祭護喪、光禄・大鴻臚為副、将作大匠復土、将軍営成陵墓、乃詔百官群吏、車旗服章喪葬礼儀、一如漢氏故事」としている。もしこの「礼」が墓室構造にも及んだのであれば題湊系横穴式墓葬の築造が考えられる。

五　漢代墓葬の構造

前章までにおいて、漢代皇帝陵の構造である題湊系横穴式墓葬を文献・発掘例の両面より対比し、その変遷を追ってみた。漢代皇帝陵の構造には元来何らかの一定の決められた形態が存在していたものと思われる。現在その内容を知ることはむずかしいが、恐らくそれは『後漢書』礼儀志下の劉昭注に言う様な「礼」の規定という形で定められたものであったのではないかと思われる。そのために黄腸題湊はたとい木材不足という様な難しい条件を抱えながらも形式的に二世紀まで残存させる必要があったと考えられるのである。これを敷衍していくと漢代皇帝陵の基本構造自体も漢代を通じて余り変化していないのではないかという想定に連なることになろう。

この皇帝陵の構造の各部分は、臣下に対して下賜される例が多く見られる。最も例が多いのは梓棺（画棺・朱棺）の例である。[1] 梓棺の下賜が一定の墓室構造の選択にストレートに結びつくとは思えないが、黄腸題湊や便房が下賜される例がある点を考えると、皇帝陵の墓室構造の部分が下賜される場合があった事を想定しておく必要がある。そしてこの様な賜与は必然的に大型墓被葬者クラスに対する皇帝の側から行なう墓葬の一つの秩序づけともなり得たであろう。下賜を与えられるようなクラスの墓葬には、題湊系横穴式墓葬の変化形に属する形態が出現することが考えられる。

また下賜にこだわらず、題湊系横穴式墓葬が模倣的に製作された場合には、それが理念のみの模倣であるか、プランを意識しての模倣であるかによって、また様々の構造を取っていたことが考えられよう。

以下、現在までに報告されている漢代の各種墓葬を逐次取り上げて、その構造を題湊系横穴式墓葬を基準にして考察してみたい。

(1)　満城漢墓M1[2]

河北省満城県に存する。副葬銅器に「中山内府」「中山府」の刻銘があり、同時に記された王の在位年数に三〇年以上

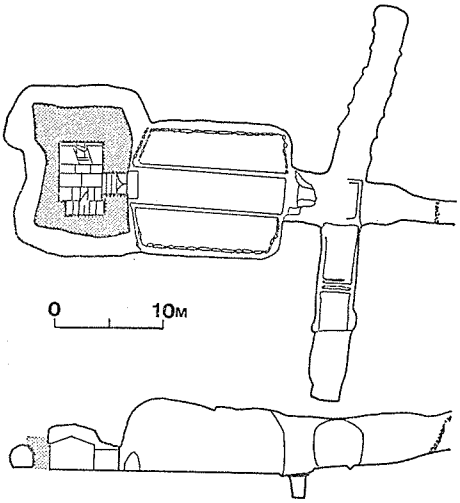
のものが数多くある。死者が金鏤玉衣を身につけていた事と合わせて、武帝の庶兄にあたる中山靖王劉勝が被葬者と推定されている。

墓は山の中腹より掘り込まれた崖墓で、全長五一・七m、最大幅三七・五m、最高部六・八m。墓道・甬道に続いて中室・後室があり、甬道の左右に細長い耳室が設けられる。後室の周囲には回廊が一周して掘られている。

墓道は全長二〇数mで副葬品は納められていなかった。

南耳室は長さ一六m、幅三m強の細長い洞室で、馬車六両・馬一七匹他を入れている。天井には覆屋があった。遺物としては、羨道内方に置かれる「大車・六馬」に相当する。この南耳室は皇帝陵における羨道内方の機能を不十分ながら代行していることになる。

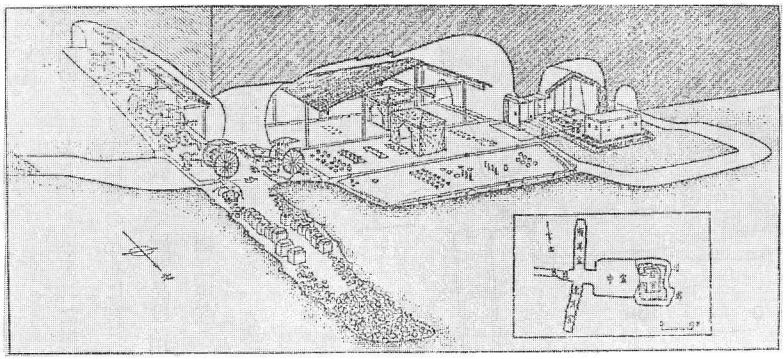
図7　満城1号漢墓



北耳室は大小・作りが南耳室とほぼ同じで、五〇〇件以上の陶器類が入っていた。外蔵槨に入れられる副葬品の明器にあたる。北耳室自体も外蔵槨の前の部分にあたる。

中室は方形に近い部屋で、長さ約一五m、幅一二m強。この中に、木造の屋根付きの建物（間口三間、奥行三間）を建てていた。屋根には瓦が葺かれており、丸瓦・平瓦が出土している。侍従奴僕の俑の他、日常生活用品が多数入っており、帷帳の金具が二張分発見されている。遺物からみても、ここが死者の居住空間・饗宴の場であったと思われる。墓内の部位的にも機能的にも便房に相当する。満城M1の二つの帷帳が大葆台M1の二つの漆床に、満城M1の瓦葺建物が大葆台M1の三梁四柱の制を持つ木造建築にあたる。

図8　満城1号漢墓復原図



中室の後部には、漢白玉石製の門を介して後室が作られる。後室内部一杯に板石で作った石室が入り、その石室内壁には一面に紅漆を塗っていた。石室北端の棺床の上に棺が置かれ、その周辺に金鏤玉衣の他、多量の玉器類（璧など）が置かれていた点が注目される。ここは、梓宮に相当しよう。位置的にも便房の後方にある。室内の石室は大葆台M1の五層の棺の最外層の棺に相当する。かなり大きなものであるにもかかわらず石室内部に紅漆が塗られていたのは、石室全体が棺と意識されたために他ならない。大葆台M1の外層の棺には便房に通じる門扉があったが、満城では漢白玉石の門がこれに相当する。

後室の周囲には高さ二m前後のトンネル回廊がひとめぐりしている。回廊自体には副葬品も入っておらず、形態的にも小さすぎてあまり意味がないように見えるが、墓室平面図を見ると、この回廊に重要な意味があった事がわかる。すなわち回廊そのものではなく、回廊と後室の間の掘り残された部分が黄腸題湊の形になっているのである。この回廊自体は機能はともかく、墓室内の部位としては外蔵槨に相当することになる。

大葆台M1と満城M1の平面プランを比較してみると、大葆台M1では梓宮・便房を大きく取り囲んでいた黄腸題湊が、満城M1では便房を囲っていないことがわかる。もし大葆台M1のプランに近い形を満城M1で掘り抜くとすれば、後室をめぐる回廊の出発点を南耳室と北耳室の先端部に変更し、ここからトンネルの外蔵槨を掘り進めて後室の後ろで結合させる形を作らねばならない。こうすれ

ば、回廊と中室・後室の間の部分が黄腸題湊の形になろう。但し、このような大がかりなトンネルを掘ることはその手数を考えれば実行が躊躇されるものと思われるし、大葆台M1の構造を皇帝陵の唯一のプランと考える必要も必然性もないことは先述した通りである。

以上の考察を通じて満城M1は多少の変形を伴ないながらも梓宮・便房・黄腸題湊・外蔵槨・羨道を備えていることがわかった。大葆台M1・定県北庄漢墓とともに、題湊系横穴式墓葬の一例とすることができよう。

なお、この満城M1の横に作られた劉勝の妃の竇綰の墓であるM2や曲阜九龍山の前漢魯王一族の墓とされる崖墓は[3]、いずれも満城M1より問題の回廊を取り除いた形を基本形にしていて、皇帝陵の理念をもとにして作られた題湊系横穴式墓葬の中に入れて考えることができよう。

(2) 長沙咸家湖西漢曹嫄墓[4]

湖南省長沙市において発見された紀元前二世紀後半の西漢墓で、岩山の頂上から墓壙を掘り込んで墓道付の大型竪穴木槨墓を作っている。柏木の内槨・外槨は共に一方の短辺の壁を取り払ってあり、内槨内に三層の棺が納められている。梓宮に相当する部位であるが大葆台M1に比べて棺が二層少ない。平面コ字形の内槨は大葆台M1のコ字形の槨に相当しており、一方の短辺の側壁を取りはずして便房に通じさせている点も同一になる。内槨の西側に四本の角木をしきつめて構成される平台がある。この上には、漆案・果核を乗せた漆盤・漆奩・漆耳杯などが置かれ、いずれも供饗用品と推定される。ここが便房に相当する。

外槨の外側には四周に計一七九本の粗大な黄心の柏木を積んでいる。これが黄腸題湊に相当する。南北東壁は木を三層しか積んでいないので外槨壁よりも黄腸題湊の方が丈が低い。西壁は墓道に通じさせる事を意識してか更に低く二層しか積んでいない。また、外槨の西壁は取り払われて存在しないので墓道を通って墓室内に入ると、ぽっかり口をあけた外槨があって、その前半分の便房に何の障害もなく入れる様な形になっている。大葆台M1との比較で言えば、便房・梓宮は

本来なら直接黄腸題湊に接して囲まれているはずのものであるから、外槨の側壁は西壁に限らず四方向とも不必要なものになる。

黄腸題湊の周囲には内がわから木炭・白膏泥・風化岩と黄沙土が岩盤との間に詰められている。

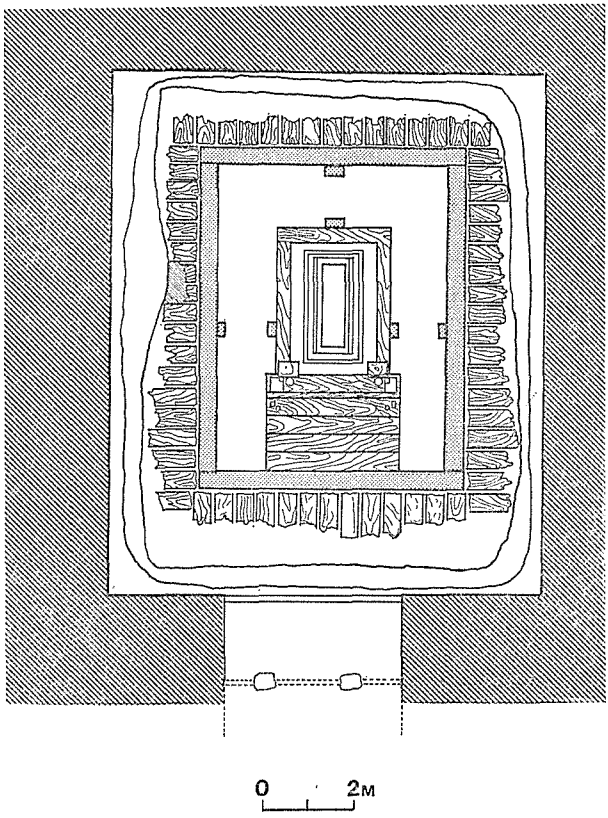
墓道は素掘りの斜坡式墓道で、墓道下口が墓坑底より六〇㎝高くなっている。重要な設備は何もなく、トンネル構造は取らない。

報告は、玉印・瑪瑙印に「曹媛」「妾媛」の刻字がある点も考慮して、被葬者を諸侯王である長沙王の近親か妻妾と考えている。

この墓葬はその全体的な作りは長沙で戦国以来続く斜坡墓道を持つ竪穴式木槨墓であり、この竪穴木槨系のやり方に異質な題湊系横穴式墓葬の要素が混入していると言う事ができる。そのために題湊系横穴式の要素には変更を強いられている点がある。題湊の作り方・墓道の構造・便房の屋根構造・外蔵槨の省略など多くの点があげられる。

造墓思想の点からみても、木槨竪穴式と題湊系横穴式という二種の葬法は本来全く理念を異にする埋葬法であり、この

図9　長沙咸家湖西漢墓



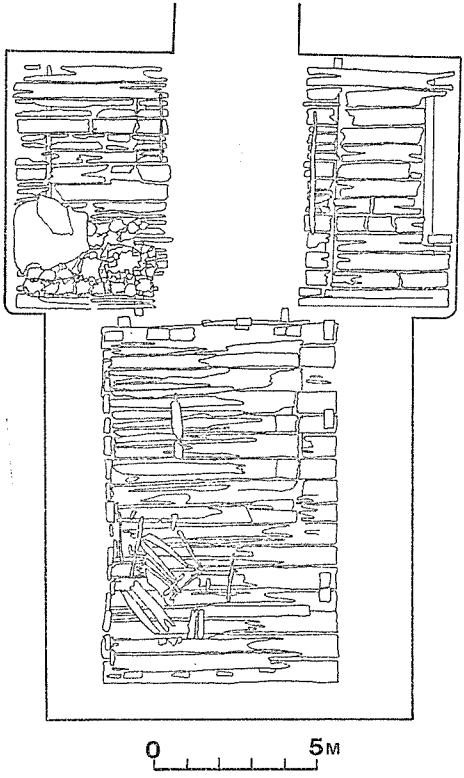
二つをミックスすることは実際は非常に奇妙な事と言える。そのためにどちらの埋葬法にも、その葬法の根本を覆えすような変更が加えられざるを得なくなる。このような墓葬が現実に構築され得た理由としては、造墓思想やその思想を具体化させるための墓のとるべき構造に対する配慮ぬきで、文字通り「題湊系横穴式墓葬」という形式のみが取り入れられていればよいという事情があった事が考えられる。そのような墓葬を作る人物としては、題湊系横穴式墓葬を実際の埋葬法としてではなく単なる形式としてでも必要とする人物が考えられるが、長沙在地の人物よりは劉氏長沙王と共に流入した人間の方にその可能性が強いのではなかろうか。

(3) 長沙徐家湾M401⑤

主室より「劉驕」の銘を有する銀印を出している。この墓の二〇m西南にあった長沙王后の墓より「楊主家般(盤)」と「今長沙王后家般(盤)」銘のある漆盤が出土し、この墓よりも「楊主家般(盤)」銘のある漆盤が出ている。従って、徐家湾M401の被葬者である劉驕も長沙王劉氏の一族である可能性が強い。

墓室は極めて規模が大きく、全長二〇・三四m、深さ八・八mを計る。前後二室に別れ、前室は長さ八・〇m、幅一三・七m、後室は長さ一二・三四m、幅一一・一mあり、長さ四五m、幅四～四・八mの水平墓道が付随する。これが羨道に相当する。

図10　長沙徐家湾401号墓



後室に納められた槨も一〇・八m×六・七mという巨大なもので、その前室側の側壁は門扉になっていたと推定されている。その大きさと内部前方に納められている副葬品の中に銅鼎・銅壺・漆杯・銅鈁・銅炉・銅灯・漆盤があることから考えて、この槨内は梓宮と便房を兼ね合わせた機能を備えていたと考えられる。長沙系の木槨とは同じ木槨でも規模・構造・機能が異なっている。

前室の左右両端に各々一つずつ木槨が入り、副葬品が収められている。本来外蔵槨に入るべき副葬品がここにまとめられる。満城M1の耳室にあたる。副葬品中にミニチュアの馬車があり、皇帝陵の馬車の埋納に相当する。

前室中央部には墓道とほぼ同じ幅の空間があり、墓道と槨を結ぶ通路になっている。大葆台M1・満城M1の甬道部に相当する。この墓には墓室規模・構造（槨も含めて）に長沙系の竪穴式木槨墓とは極めて異質の点がある。劉氏関連の墓葬であるために題湊系横穴式墓葬の墓室構造が完全な模倣ではなく理念として入り込んでいるとみることができよう。その点は満城M2や曲阜九龍山に共通している。

(4) 石室墓

河南省南陽楊官寺画象石墓[6]と唐河県針織廠画象石墓[7]とは、ともに東漢前期に属する墓葬であり、従来知られる画象石墓の中では年代的に最も古い時期に属する。ともに石板を組み合わせて作られた石室墓で、内部構造もよく似通っている。ほぼ正方形に近い墓室の中央部に縦長の棺室（主室）を二つ横に合わせて設け、周辺を回廊状にしている。ともに合葬を前提とした墓室構造であるが、この棺室を一つに置き換えて、凵形の石壁を黄腸題湊と考えれば、基本的構造は題湊系横穴式に一致する。周辺の回廊が外蔵槨になり、黄腸題湊代りの石壁内に梓宮が入る。盗掘の為、遺物配置が明確でないが、石壁に付く門扉が梓宮から便房に通じる門扉と対応しよう。主室の奥行が三m弱しかないので主室には棺しか入らない。前室とされる回廊の前方部が便房の機能も兼ねていると思われる。[8]

このような大型の正方形の墓室構造を石板・磚で作る墓葬は定県北庄漢墓を含めても極く少数しか例がなく、墓室構築

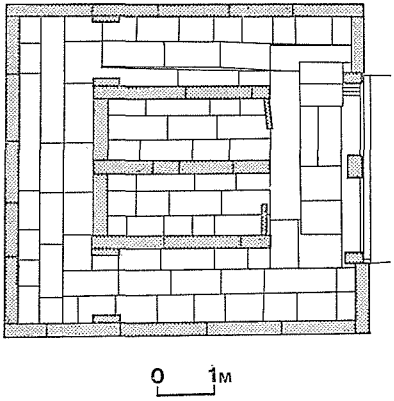
の上からもあまり効率的な方法とは思われない。このようなやり方が敢えて採用される背景としては定県北庄漢墓同様、題湊系横穴式墓葬を模倣するという目的があった事が考えられる。この二つの画象石墓においては、墓室構造全体は題湊系横穴式墓葬にそっくりに作られながら黄腸題湊そのものはまねられていないことになり、西漢代の題湊系横穴式墓葬とも定県北庄漢墓ともいささか異なった点が感じられる。

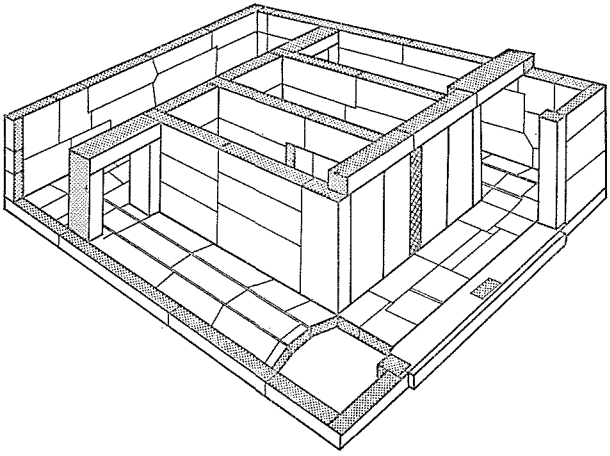
この楊官寺・唐河の墓葬形態から後部の外回廊を取り外した形が、河南省銅山県苗山漢墓⑨・南陽石刻墓⑩・山東省梁山漢墓⑪などの石室墓・磚石併用墓にあたる。

(5) 遼寧の石室墓

遼寧省遼陽市近郊の、後漢晩期より魏晋代に築造されたと推定される石室墓にも同様のことが言えよう。この類例としては、棒台子屯⑫・南雪梅村M1・同M2⑬・棒台子M2⑭・上王家村⑮・北園M六⑯・迎水寺⑰・南林子⑱・三道壕M1・同M2⑲・三道壕窯業第二現場・同第四現場⑳がある。

図11　南陽楊官寺画象石墓





いずれもかなり正方形に近い墓室を石材で構築しており、棺室を墓室中央に置くものが多い。二～四個の過道のつく幅広の門に続いて奥行のない横長の前室があり、これに棺室が付く。棺室の後ろにも前室とほぼ同じ幅の後室が付く例がある。南林子・迎水寺・北園M六・棒台子屯・南雪梅村M2では両側にも回廊が入って平面プランが楊官寺画象石墓と同一構成になっている。上王家村・三道壕M1・同M2などはむしろ南陽石刻墓など後部の回廊がとれた形に近い。

これら石室墓群は遼陽市の周辺に存在して、ほぼ共通して壁画を描いており、一連の性格と年代を持つことが窺えるが、その墓室構造にはかなり多様な面がある。従ってこれら石室墓の墓室構造だけを御互いに見比べてみるだけではその墓室構成には何の規則性もないように見えるが、題湊系横穴式の墓葬を基準にして考えれば、これら墓葬はいずれも題湊系横穴式の変化形として捉える事ができる。多様性はその変化のさせ方から生じているもので、題湊系横穴式からの変化という点では全てが一致している。

なおこの遼寧の石室墓との構造上の連関を言われる朝鮮の遼東城塚[21]（平安南道順川郡）・安岳三号墳[22]（黄海南道安岳郡）も同様に題湊系横穴式墓葬の変化形に属する。

図12　南陽石刻墓

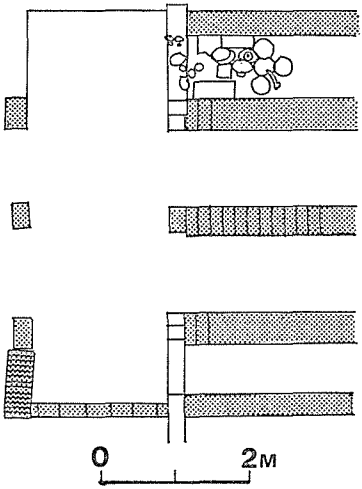
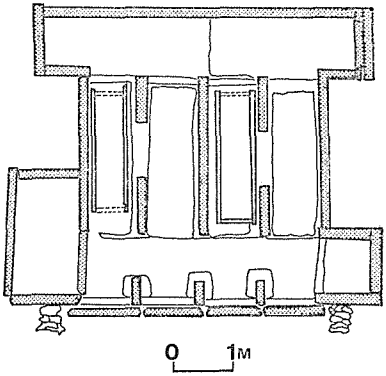
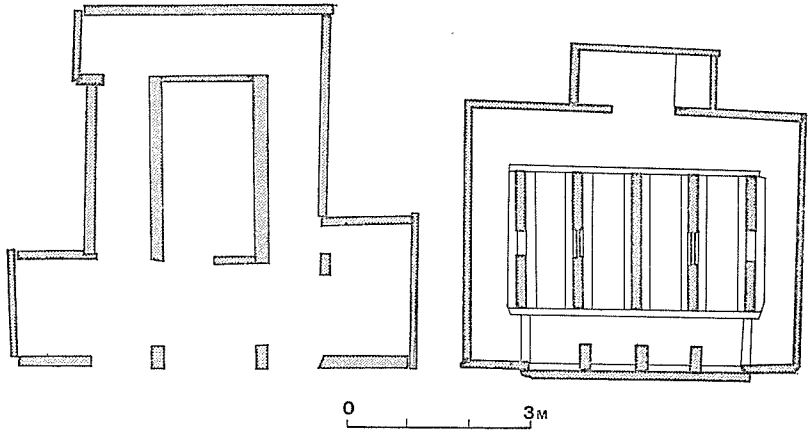


図13　棒台子2号石室墓



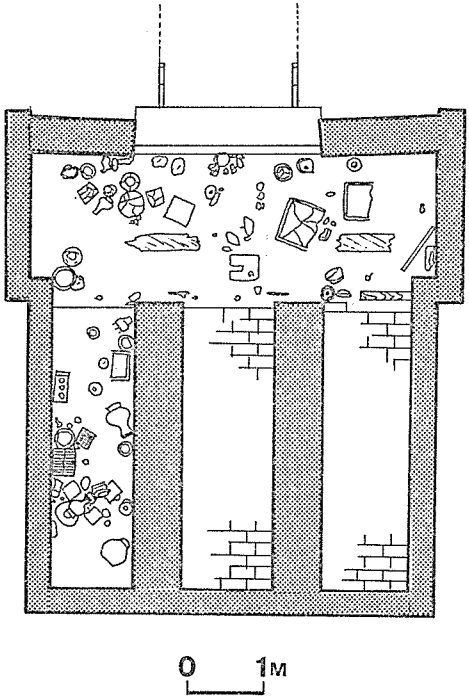
(6) 磚室墓

図14 南林子・迎水寺石室墓



（南林子）　（迎水寺）

図15 広州東山磚墓



磚室墓においては、直接題湊系横穴式墓葬との関連を想定させるものは少数しかない。

広州東山漢墓は、㉔奥行のない前室に棺室とその両側に回廊をつける形を取る。前室より派生する形の三室はほぼ同形で三つとも棺室のようにも見えるが、前室より見て右側の部屋は副葬品を部屋いっぱいに詰めていて、機能的には外蔵槨の役割を果たしている。(4)の南陽石刻墓の場合も左側の部屋がやはり副葬品入れとして機能していて、このスタイルの墓葬の棺室両側の部屋が単なる棺室の並列を目的として作られたもので

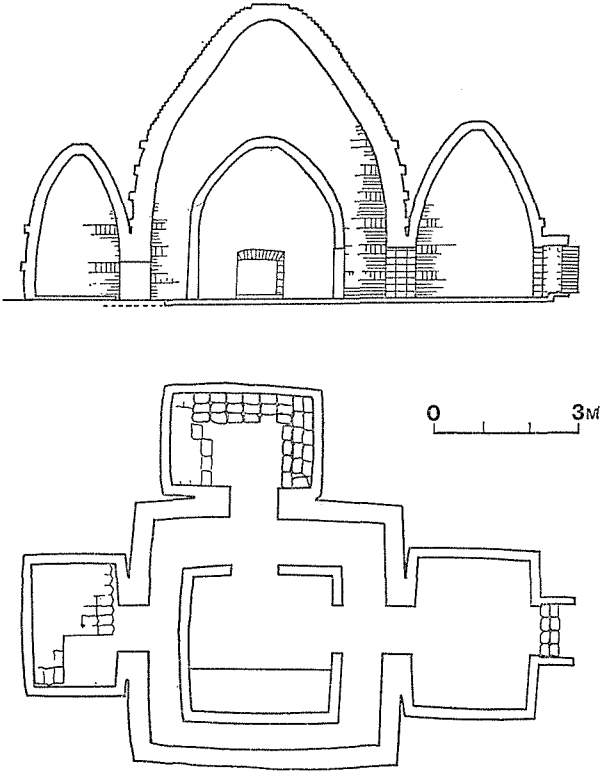
はない事を示している。昌梨水庫M3[24]もこのスタイルの磚室墓である。

遼寧省旅大市営城子会沙崗子屯の営城子M2[25]は、前室・套室と二つの側室から構成される。報告は中央の套室の中につくられた磚壁の内部だけを主室とし、その周辺の回廊状の部分を套室と呼んでいる。しかし、断面図を見れば歴然としているように、前室・側室と構造的に一連のものとして作られているのは套室の方であって主室は套室内に作られた別個の構築物になる。この主室は独自の屋根構造を持っているけれども黄腸題湊の変化形であり、その周囲の回廊が外蔵槨に相当する。主室内は墓道より向って左側が梓宮、右側が便房に相当する。梓宮・便房を屋根で覆うことは題湊系横穴式墓葬の造墓思想に合致する。営城子M2の報告者は、この主室・套室の重屋構造の解釈に苦しんで、「我々が未だ知らない支那(ママ)本土に於て夙にこの種の構造があったか」と述べているが題湊系横穴式墓葬によってその構造を解釈する事ができる。

磚室墓には題湊系横穴式墓葬に属する例が少なく、定県北庄漢墓を含めても今の所三例しかない。[26]

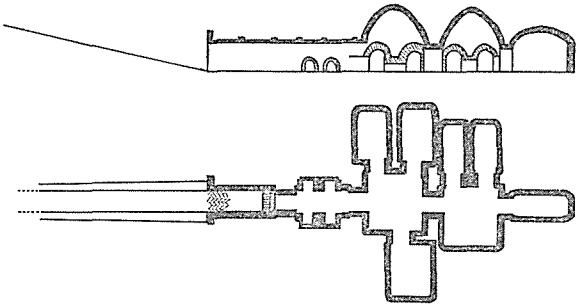
後漢代を通して中・小型墓の構造は前室・後室の二室を中心とする磚墓が一般的かつ支配的である。これは『洛陽焼溝

図16　旅大市営城子2号墓



漢墓』で言うⅢ式・Ⅴ式の墓室構造に相当する。後漢後半期になると部屋数が多い多室構造の大型磚墓がきわめて多く作られるようになる。既発表のこの時期の大型墓は沂南画象石墓の他は全て多室磚墓の形を取っている。特に各種の玉衣を副葬する墓葬に題湊系横穴式のプランを持つ例がなく、望都2号㉗・洛陽東関殉人墓㉘・江蘇睢寧九女墩漢墓㉙・定県43号㉚・安徽亳県曹操宗族墓㉛・徐州彭城王一族墓㉜はいずれも多室磚墓のスタイルを持つ。この他にも、河南密県打虎亭1号・同2号㉝・石家庄㉞・武威雷台㉟・禹城漢墓㊱・内蒙古拉特前旗公廟子M1㊲・嘉峪関3号㊳・河南茨城㊴・潼関吊橋M4㊵・望都1号㊶・ホリンゴール新店子1号㊷など全国各地の大型墓が軒並み多室磚墓のスタイルを採用している。

図17　内蒙古拉特前旗公廟子1号墓



これら大型墓は、饗宴の場としての前室の後に後室（棺室）をつけ加えるという磚室の基本的構造は保っているが、それ以外には定形と言えるものがない。磚墓の時代的変遷という観点からみて、これら大型多室磚墓は後漢前半期の中・小磚墓が規模の面で大型化してでき上ったものと思われ、多室磚墓の成立自体に題湊系横穴式墓葬からの直接の影響があったとは考えられない。

陝西省潼関県吊橋楊氏墓群は、七基の墓葬が東西に並列して一つの墓地を構成する。この墓群は東から西へ順番にM2→M7→M3・M5→M4の順で作られたと考えられるが、これを墓室構造の変遷でみてみると、洛陽Ⅲ式→同Ⅴ式→多室磚墓の順になっており、多室磚墓の発生過程をうかがわせるものがある。

以上、本章では題湊系横穴式墓葬の墓室構造を念頭に置いて、これが各地の漢代墓葬に与えている影響を考察した。満城M1以下の西漢代の大型墓葬が題湊系横穴式墓葬の墓室プランの正確な模倣よりもむしろその理念（死後の生活空間としての地下宮殿）の継承を主眼としているのに対し、東漢代の大型墓の範疇には入れにくい石室墓

・磚室墓が題湊系横穴式墓葬の墓室構造を全体的に模倣することをめざしている点に特色が見受けられる。

この二者と対照的に東漢後半期の大型墓が多室磚室の構造を取ることが、題湊系横穴式墓葬の影響力という面から問題を提供している。

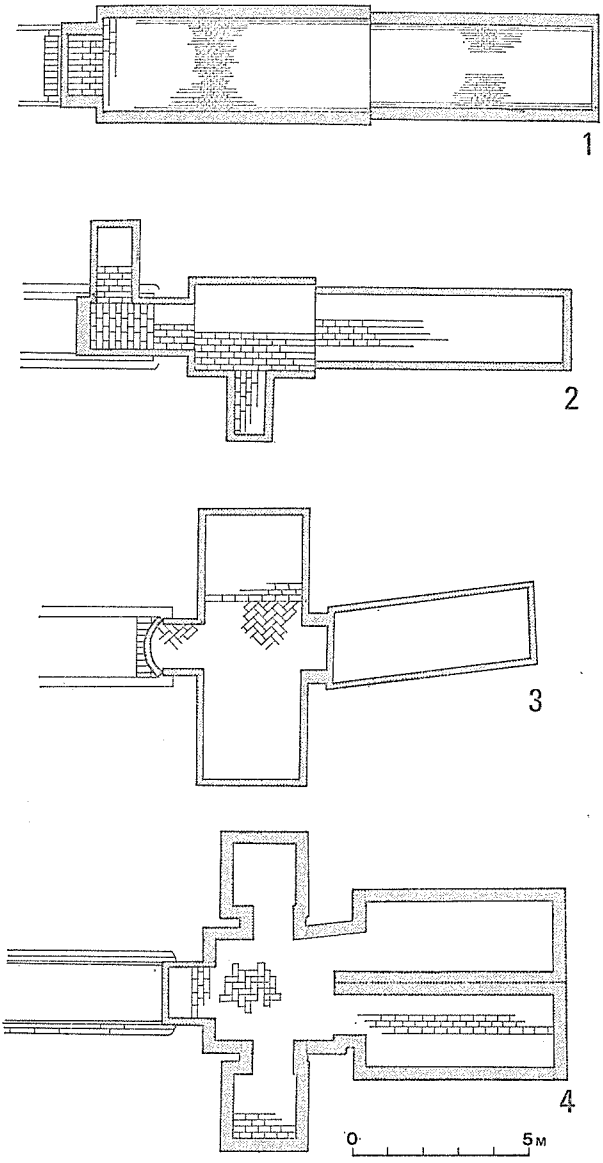
① 第四章注⑭八七、九五、九六頁

② 中国科学院考古研究所満城発掘隊「満城漢墓発掘紀要」考古一九七二年第一期

中国社会科学院考古研究所・北京儀器廠工人理論組『満城漢墓』一九七八年

③ 山東省博物館「曲阜九龍山漢墓発掘簡報」文物一九七二年第五期

図18 潼関楊氏墓群
(1. 2号墓 2. 7号墓 3. 3号墓 4. 4号墓)



④ 長沙市文化局文物組「長沙咸家湖西漢曹嬢墓」文物一九七九年第三期
⑤ 中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』一九五七年九五頁
⑥ 河南省文化局文物工作隊「河南南陽楊官寺画象石墓発掘報告」考古学報一九六三年第一期
⑦ 周到・李京華「唐河針織廠漢画像石墓的発掘」文物一九七三年第六期
⑧ 定県北庄漢墓のプランに最も近い。
⑨ 王徳慶「江蘇銅山東漢墓清理簡報」考古通訊一九五七年第四期
⑩ 河南省文化局文物工作隊「南陽漢代石刻墓」文物参攷資料一九五八年第十期
⑪ 関天相・龔剛「梁山漢墓」文物参攷資料一九五五年第五期
⑫ 李文信「遼陽発現的三座壁画古墓」文物参攷資料一九五五年第五期
⑬ 王増新「遼寧遼陽県南雪梅村壁画墓及石墓」考古一九六〇年第一期
⑭ 王増新「遼陽市棒台子二号壁画墓」考古一九六〇年第一期
⑮ 李慶発「遼陽上王家村晉代壁画墓清理簡報」文物一九五九年第七期
⑯ 李文信「遼陽北園画壁古墓記略」瀋陽博物館籌備委員会彙刊第一期一九四七年
駒井和愛「遼陽北園の漢代墳墓」『中国古鏡の研究』一九五三年
⑰ 浜田耕作「遼陽附近の壁画古墳」民族と歴史第六巻第一号一九二一年、『東亜考古学研究』一九三〇年所収
⑱ 原田淑人「遼陽南林子の壁画古墳」国華六二九号、一九四三年
⑲ 東北博物館「遼陽三道壕両座壁画墓的清理工作簡報」文物参攷資料一九五五年第十二期
⑳ ⑫に同じ
㉑ 兪偉超「跋朝鮮平安南道順川郡龍鳳里遼東城塚調査報告」考古一九六〇年第一期
㉒ 岡崎敬「安岳第三号墳（冬寿墓）の研究」史淵第九十三輯一九六三年
㉓ 広州市文物管理委員会「広州東山東漢墓清理簡報」考古通訊一九五六年第四期
㉔ 南京博物院「昌梨水庫漢墓群発掘簡報」文物参攷資料一九五七年第十二期
㉕ 東亜考古学会『営城子』東方考古学叢刊第四冊、一九三四年
㉖ 河北任邱東関漢墓は中室を左側にもう一つ加えて、後室を拡張すれば題湊系の形になる。しかし、長方形磚墓四つをたまたまこの様な形に組合わせただけかもしれないので除外した。
天津市文化局考古発掘隊「河北任邱東関漢墓清理簡報」考古一九六五年第二期
㉗ 河北省文化局文物工作隊『望都二号漢墓』一九五九年
㉘ 余扶危・賀官保「洛陽東関東漢殉人墓」文物一九七三年第二期
㉙ 李鑑昭「江蘇睢寧九女墩漢墓清理簡報」考古通訊一九五五年第二期
㉚ 定県博物館「河北定県43号漢墓発掘簡報」文物一九七三年第十一期
㉛ 安徽省亳県博物館「亳県曹操宗族墓葬」文物一九七八年第八期
㉜ 『日中国交正常化記念　中華人民共和国出土文物展』一九七三年
㉝ 安金槐・王与剛「密県打虎亭漢代画像石墓和壁画墓」文物一九七二年第十期
㉞ 河北省文物管理委員会「石家庄市北宋村清理了両座漢墓」文物一九五九年第一期
㉟ 甘粛省博物館「武威雷台漢墓」考古学報一九七四年第二期
㊱ 山東省文物管理委員会「禹城漢墓清理簡報」文物参攷資料一九五五年第六期
㊲ 無名氏「内蒙古烏拉特前旗清理古墓一座」文物参攷資料一九五四年第四期

㊳ 嘉峪関市文物清理小組「嘉峪関漢画像磚墓」文物一九七二年第十二期
㊴ 河南省文化局文物工作隊「河南襄城茨溝漢画象石墓」考古学報一九六四年第一期
㊵ 陝西省文物管理委員会「潼関吊橋漢代楊氏墓群発掘簡記」文物一九六一年第一期
㊶ 北京歴史博物館・河北省文物管理委員会『望都漢墓壁画』一九五五年
㊷ 内蒙古文物工作隊・内蒙古博物館「和林格爾発現一座重要的東漢壁画墓」文物一九七四年第一期
内蒙古自治区博物館文物工作隊『和林格爾漢墓壁画』一九七八年

六　題湊系横穴式墓葬の歴史的意義

第五章においては題湊系横穴式墓葬が個々の漢代墓葬に与えた影響を考察した。それらの墓葬を築造年代と被葬者の身分・墓葬規模によって類別的に促えてみた場合、その影響力のあり方にかなりの相違があった事が考えられてくる。以下には、漢代墓葬を大型墓を中心に体系的に促える作業を行ない、題湊系横穴式墓葬が漢代墓葬の中で持っている歴史的意義を探ってみたい。時期を三期に区分して行なう。

(1) 西　漢

西漢の皇帝陵の構造としては、「漢旧儀」などの文献と大葆台M1の発掘によって、黄腸題湊を持つ横穴式墓葬が考えられる。

西漢大型墓の中では、長沙咸家湖・満城M1・大葆台M1・定県M40①に黄腸題湊（ないしその擬似形）が認められる。定県M40は墓室構造の詳細がわからないが、大葆台M1以外の咸家湖・満城M1では題湊系横穴式墓葬の理念はかなり忠実に守られている。咸家湖・満城M1・大葆台M1・定県M40の被葬者は、各々、劉氏長沙王の妻妾又は近親者、武帝の庶兄の劉氏中山王、武帝の子の劉氏燕王、元帝の子の劉氏中山王と考えられている。満城M1では木でこそ作られていなかったが、トンネル回廊をくり抜いてわざわざ黄腸題湊をこしらえており、黄腸題湊がそれを模倣的に作る事にも意味がある構造とみなされた事が理解できる。宣帝代に権力を一手に掌握していた霍光ですら、死後の下賜によってはじめて題

湊系横穴式墓葬の制作が可能になっている。[2] 題湊系横穴式墓葬は皇帝との一定の血縁関係・親疎関係の表象、言い換えればきわめて高度な身分秩序の表象と考えてよかろう。さらに言えば、その親疎関係に基いて霍光の例の様な題湊系横穴式墓葬のまるごとの下賜の他に下賜にも色々な段階があり、それが更に細かな身分秩序の表象として作用していた事が推定されよう。

大型墓の中にも題湊系横穴式墓葬乃至その変化形に属さないものがある。その実例として、長沙馬王堆[3]・同砂子塘[4]・安徽阜陽双古堆[5]・江蘇漣水[6]・山西孝義[7]などの竪穴式木槨墓があげられる。馬王堆は初代軑侯とその家族、双古堆は汝陰侯（夏侯氏）又はその家族が被葬者であり、砂子塘は呉氏長沙王の墓と推定する人もいる。諸侯クラスの人物においても墓室形態にかかわる様な下賜がない限り、彼らの作る墓葬は在来の竪穴式木槨墓がむしろ一般的ではなかったかと思われる。

先述の徐家湾M401も規模の点では大型墓の範疇に入る墓であり、しかも長沙には珍らしい横穴式の構造を持ちながら、黄腸題湊そのものがなく、墓室も題湊系横穴式墓葬の形をストレートにはまねていない擬似的構造にとどまっている。長沙王后と関連する劉氏であっても、そこに黄腸題湊を持つ題湊系横穴式墓葬を作りうる人間との間の身分差が考えられよう。このことは満城M2や曲阜小亀山漢墓についても言える。[8]

(2) 東漢前半期

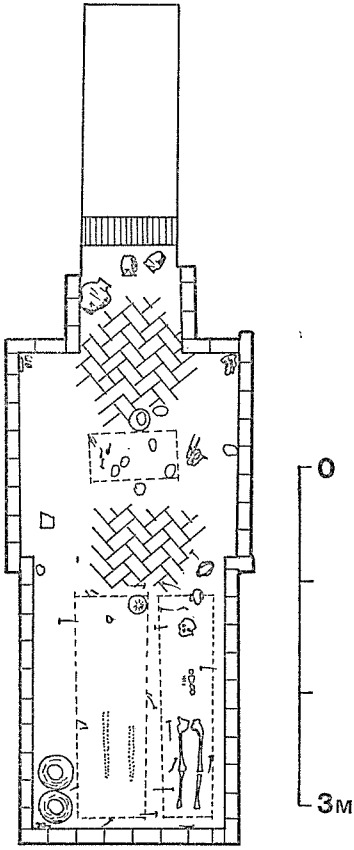
王莽によって簒奪された劉氏政権はA.D.25年劉秀（光武帝）によって回復された。東漢王朝が西漢劉氏の後継者をもって任じるのであれば、その陵においても当然西漢皇帝陵が継承されねばなるまい。傍系劉氏出身である劉秀にとって、陵の構造も自己の正統性の主張としての意義を持ちうる。従って東漢皇帝陵にも依然題湊系横穴式墓葬が採用されたことが考えられる。事実、『後漢書』礼儀志下に記載される皇帝陵は、予想されるその墓室構造において、西漢の皇帝陵に比べて根本的には何らの変化もみられない。このことは、一世紀後半の定県北庄漢墓の実際の構造からも逆推することができる。

大型墓においても、西漢と同様題湊系横穴式墓葬の存在が考えられる。今の所、この時期に属する大型墓の例としては定県北庄漢墓の如き、磚造りの黄腸題湊を有する題湊系横穴式墓葬の例しか実例を挙げえないが、逆に言えば木を磚に代えてでも模倣するだけの価値を黄腸題湊を有する題湊系横穴式墓葬が持ち続けていたことの証ともなろう。

一方、この黄腸題湊を有する題湊系横穴式墓葬を黄腸題湊をぬきにして墓室プランとしてまねる墓葬がそれほどの大型墓とも言えない墓葬にも新たに出現してくる。楊官寺・唐河・南陽石刻墓の様な石室墓・磚石併用墓、広州東山磚室墓がその例となる。この様な墓葬の存在は、西漢代におけるような題湊系横穴式墓葬の特権的性格を著しく損うことになりかねない。しかも、題湊系横穴式墓葬の墓室プラン全体の模倣にとどまらず、墓室構造の部分採用・理念の模倣が磚室墓を中心に大量に出現してくる事実が認められる。洛陽焼溝Ⅲ式の中小磚墓や広州皇帝岡M42・同龍生岡M43などの様な横入り墓門付の木槨墓がこの例になる。

かつて駒井和愛氏は楽浪の漢代塼槨にみえる幾何学文様を黄腸題湊の内側の木口の木目を表出したものだと考えられた。[9] 大葆台M1の黄腸題湊はこの推定がきわめて正確であった事を示すとともに、現在我々が数多くの類例を知り得ている中・小型の漢代磚室墓はその墓室部分の比定だけから言うと、実は大葆台M1のような形態を持つ墓葬の黄腸題湊以内の部

図19　洛陽焼溝1026号墓



分のみを簡略化して築いたものがその基本的形態であったことが理解されるのである。

すなわち、中小磚室墓における外周の磚壁は、大葆台M1の外周の壁（外回廊の外周の壁）ではなく、黄腸題湊の内側壁にあたっている事になる。この事は、中小磚室墓が棺室とその前方に付された饗宴の場という黄腸題湊の内に入っている梓宮と便房に匹敵する部位からのみ成り立っている点からみても明らかである。

西漢中期後半以降、中小墓が大墓を指向するようになる事は町田章氏の指摘される点であるが[10]、それが本格的に墓室構造に及ぶのは東漢に入ってからになる。磚墓の洛陽焼溝Ⅲ式は洛陽焼溝Ⅲ期前半（西漢後期）に既に出現しているが、その本格的流行はⅢ期後半（東漢前期）をまたねばならない。

本来的にはその資格を持たない者が題湊系横穴式墓葬の模倣を行うことは、その特権的性格・身分秩序の表象としての価値を著しく落とす行為になる。その点で、西漢・東漢の劉氏政権の墓葬に対する規則力の及び方にはかなりの相違があることを予想させる。

(3) 東漢後半期

二世紀の皇帝陵が題湊系横穴式墓葬を受け継ぐ意志を持っていた事は黄腸石の存在によって推測しうる。もし『周礼』夏官方相氏の鄭玄注が賈公彦の疏に言う通りの意味であれば、二世紀の黄腸題湊には木石が半々ずつの構造を取るものがあったことになる。部分にせよ石で黄腸題湊を作ることは、その本来的な意義・用法を満たすものではありえない。魏文帝が黄腸題湊を「諸々の愚俗の為す所」と理解したとしても、少なくとも効能の面からは、それは極めて正当な認識ではないかと考えうる。二世紀の皇帝陵がそれでもなおかつ黄腸題湊の製作を止めないのは、黄腸題湊の本来的意義を認めてというよりは皇帝としての身分の表象という意義を強く意識してのことであろう。

一方、大型墓においては題湊系横穴式墓葬をまねることはもはや衰退したらしい。現在知られるこの時期の大型墓は、沂南画象石墓[11]を除いて全て多室磚墓になっており、大型墓の墓室構造の主流は明らかに多室磚墓に移っている。

この現象は、東漢前半期までは見られなかったもので、題湊系横穴式墓葬の意義に大きな相違がみとめられる。特に各種の玉衣を出土する墓葬がいずれも多室磚墓の構造を選んでいることは、題湊系横穴式墓葬が大型墓被葬者クラスの墓葬構造としては、身分秩序の表象としての意義をもはや持ち合わせていなかった為ではないかと考えられる。東漢前半期まで題湊系横穴式墓葬は皇帝の身分表象であるとともに下賜品としての価値を有し、東漢前半期には中小型墓の模倣の対象ともされた。二世紀の各地の豪族たちが自らの墓葬形態を選択するにあたって、題湊系横穴式墓葬を選ばずに中小磚墓の大型化を選んだ事は、皇帝と各地豪族達との関係に東漢前半期までとは異なったものが生じていた可能性があろう。

磚は木材と異なってその材料が無限であり、しかも一つ一つの磚室がユニットになっているので安全に墓室面積を増加させる上でも極めて容易という利点がある。題湊系横穴式墓葬はこれら多室磚墓の利点をも捨ててかえりみさせない程の価値を持たない限り採用されることはあり得ない。

東漢後半期においては自らも豪族の一員として大型の多室磚墓を作っていた曹氏[12]は、禅譲の形は取りながら実質的には自らの権力で皇帝位に登った。そのため、曹氏には漢代皇帝陵を継承して模倣しなければならない必然性は一切なかった。魏文帝の詔は公式の形での題湊系横穴式墓葬の否定の表明として重要だが、既に二世紀の豪族達によって実質的に否定的取扱いをされていた事の方により重要性があるように思われる。以上の三時期を通してみて、題湊系横穴式墓葬はその取り扱われ方の中に漢代の政治的秩序維持の度合いを明瞭に反映させているということができよう。

① 河北省博物館・文物管理処・中共定県委宣伝部・定県博物館「定県40号漢墓出土的金縷玉衣」文物一九七六年第七期

② 張安世にも題湊系横穴式墓葬が一式与えられた可能性がある。「……賜塋杜東、将作穿復土、起冢祠堂……」(『漢書』張湯伝(列伝第二十九))

③ 湖南省博物館・中国科学院考古研究所『長沙馬王堆一号漢墓』一九七三年

「長沙馬王堆二、三号漢墓発掘簡報」文物一九七四年第七期

④ 湖南省博物館「長沙砂子塘西漢墓発掘簡報」文物一九六三年第二期

⑤ 安徽省文物工作隊・阜陽地区博物館・阜陽県文化局「阜陽双古堆西漢汝陰侯墓発掘簡報」文物一九七八年第八期

⑥ 南京博物院「江蘇漣水三里墩西漢墓」考古一九七三年第二期

⑦ 山西省文物管理委員会・山西省考古研究所「山西孝義張家荘漢墓発掘記」考古一九六〇年第七期

⑧ 咸陽楊家湾M4・M5は墓室構造がよくわからないので取り上げなかった。共に横穴式墓葬で内部に家屋に類する建築が入るらしい。但し、棺槨の形は記事による限り、固囲村M2や馬王堆の様な竪穴式木槨に近い形のように思われる。
陝西省文管会・博物館・咸陽市博物館・楊家湾漢墓発掘小組「咸陽楊家湾漢墓発掘簡報」文物一九七七年第十期

⑨ 駒井和愛「漢代墳墓の塼甓と題湊」人類学雑誌五一巻一号

⑩ 第一章注①—16

⑪ 曾昭燏・蔣宝庚・黎忠義『沂南古画像石墓発掘報告』一九五六年

⑫ 第五章注㉛に同じ

七　おわりに

以上、文献にみえる皇帝陵に関する記載と北京大葆台M1の構造から、漢代皇帝陵の基本的構造を推察し、これが各地の漢代墓葬に及ぼす影響を考察して、時代を追ってその背景にある政治関係の推移を確めようとした。

実際の漢代皇帝陵の発掘例がない段階で皇帝陵の構造をうんぬんするのは早計すぎるかもしれないが、在来の資料を合理的かつ総合的に解釈することができるのであれば一つの仮説としての意義は持ち得るであろうと考えている。

実際の皇帝陵は恐らく大葆台M1に比べて規模・構造の面でも格段にすぐれた墓葬である事はまちがいなかろう。従って我々の知り得ない、大型墓とは隔絶した多くの特徴を持っている事も当然想定しなければなるまい。ただ、題湊系横穴式墓葬が大墓に下賜・模倣されていく場合、墓室構造の中で最も肝心な部分なり基本的構造なりがはずされているとは考えがたい。よって大葆台M1クラスの大型墓に基いて皇帝陵の基本的構造を考えることは決して無駄にはならなかったものと思っている。

墓葬を総合的に捉える立場からは墓の規模の面での規制の他、墓葬の宗族墓化の問題、玉製品（特に玉衣）・明器類などの副葬品も含めての総合的な判断がなされる必要もあろう。本論はこれらの重要な要素を考慮することを保留して、表面的な墓室構造のみに対象を絞っている。故に、漢代墓葬の歴史的意義の理解の方法としては一面的と言えるかもしれないが、保留した多くの要素を取り入れていく事が次の責務であると考えている。（一九七九年八月七日稿了）

（京都大学大学院生　　）

on how he came to gain the strength enough to destroy the Timurid dynasty. The most important reason, however, appears to be his conquest of Turkistan *wilayat* on the mid-stream of the Syr-darya. This, as K. A. Pishchulina earlier pointed out, can be explained by the political, economic, military, and religious significance of the region.

Arquq in question was a tiny town in Turkistan. However, according to Ibn Ruzbihan, its importance to Shaibani was comparable to that of Medina to the Prophet. The factors behind this assertion, in my opinion, are as follows. Firstly, though small, Arquq was an excellent fortress. Secondly, located in the area bodering the western end of Turkistan and the desert leading to the heartland of Mawaran-nahr, it was a strategically important point for both regions. By gaining the control, Shaibani could also be provided with abundant agricultural produce of the area.

In studying cities of Central Asia, the Japanese scholarship has tended to emphasize their role as midway points on the East-West trade route. However, as the case of Arquq shows, their relationship with nomadic people also has to be taken into account.

The Structure of the Large-Scale Tomb in the Han 漢 Period

by

Toshinori Nishimura

The tomb-burial in the *Han* period was determined by the social position of the buried, and is considered as the embodiment of the fundamental desire for the afterworld which was shared commonly by every class of the society.

In this article I analyse the structure of tomb-room, explore that of the imperial mausoleum from both sides of the literature and results of excavation, and examine the historical transition of the imperial mausoleum. Besides I pursue the relation between the imperial mausoleums and the other large-scale tombs including those of the *Lius* 劉氏一族, and inquire into the problem of the maintenance of political order in the *Han* period.

The large-scale tombs in the *Han* period can be divided roughly into

three groups: the pit-tombs with *Mokkaku* 木槨 persisting from the *Sengoku* 戦国 period, the various tunnel-tombs which originated in the *Kochodaiso* 黄腸題湊 as the imperial tomb, and the tunnel-*Senbo* 磚墓 with many rooms. And their relations can be examined by dividing them into three periods.

First: the adoption of the tunnel-tomb with *Kochodaiso* (the tunnel-tomb of *Daiso* 題湊 type) in the imperial mausoleums of the *Hsi-Han* 西漢 dynasty, its imitation by the other large-scale tombs, and the existence of the pit-tomb. Second: the predominance of the imitation of structural plan of the tunnel-tomb of *Daiso* type by small and middle tombs in the first half of the *T'ung-Han* 東漢 period. Third: the appearance of the large-scale *Senbo* with many rooms and the decline of the tunnel-tomb of *Daiso* type to the large-scale tombs in the latter half.

It seems fully adequate that the transition of these tomb-type implies how the political order was maintained in *Hsi-Han* and *T'ung-Han* dynasties.